
山神

小豆

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

山神

【Nコード】

N3186V

【作者名】

小豆

【あらすじ】

空想の時代を舞台に繰り広げられる人と獣(?)の物語。山神の存在、人間の野望…、許されることのない二人の恋を中心に展開していく少し切なく変わった物語。小川で出逢った美しい貴族の娘に恋をした狼少年は、本能と種族の壁に翻弄される。

登場人物（前書き）

随時更新予定。 ネタバレ注意

登場人物

獣族

・八丸（はちまる）

狼の遺伝子を受け継ぐ少年。美しい鈴花に恋心を抱く。

・響炎（きょうえん）

狐の遺伝子を受け継ぐ少年。八丸の幼馴染。

・美夜（みよ）

狐の遺伝子を受け継ぐ幼女。響炎の妹。

・飛鳥（あすか）

鳶の遺伝子を受け継ぐ。八丸の兄のような存在。

・猪雄（ししお）

猪の遺伝子を受け継ぐ少年。普段は優しいが、怒らせると怖い。

・葵（あおい）

狼の遺伝子を受け継ぐ少女。勝ち気な性格。

・紫苑（しおん）

山の主、鹿の遺伝子を受け継ぐ幼女。山神として大切にされている。

・アサ

紫苑の付き人。鹿の遺伝子を受け継ぐ女、ミサと双子の姉。

・ミサ

紫苑の付き人。鹿の遺伝子を受け継ぐ女、アサと双子の妹。

・七弥（ななや）

狼の遺伝子を受け継ぐ青年。八丸の血のつながった兄。

・四芭（しば）

狼の遺伝子を受け継ぐ男。八丸の父。

・伍雨（ごう）

狼の遺伝子を受け継ぐ男。八丸の叔父の一人で、右頬の深い傷跡が特長。

・六平（ろくへい）

狼の遺伝子を受け継ぐ男。八丸の叔父の一人で、恰幅の良い体系。

都の住人

・鈴花（すずか）

貴族のお嬢様。小川で出会ってから、八丸のことが忘れられない。

・朱音（あかね）

鈴花の付き人。過保護なしっかり者。

・光晴（みつはる）

鈴花の父。上級階級の貴族の一人。陽気で優しい性格。

・菊（きく）

鈴花の母。上品な美しさをもつ。

・頌澄（ほずみ）

豪族の若君。鈴花に結婚を申し込む。極度なナルシスト。

・霧木（むぎ）

頌澄の付き人。いつも冷めた表情の無口な男。術師。

一、出会い（前書き）

それは大昔、まだ人や獣に未知なる力があふれている時代のお話。
町で暮らす良民や差別をうける賤民の他にもう一つ

山奥でくらす「獣族」^{けものぞく}が、その血を絶やすことなく暮らしている頃
の話。

- ・ 現代、彼らの歴史は流れ行く時の中で、いつしか幻となっていた・

一、出会い

あたたかい春の日差しが暗い山奥を照らしている。

小川の流れもやさしく、草花もそよそよと風に揺られ、とても和やかな雰囲気山全体にあふれていた。

しかし、そんな情景とは裏腹に、

一人の少年が、必死に逃げ回る野うさぎを全力で追いかけていた。

「待て！俺の晩飯！」

ぼさぼさとした黒髪を、後ろできゅつと結んでいるその少年は、でこぼこして歩いて走りにくいはずの山道を、

人間とは思えないような速さで駆け抜けていく。

もう少しで追いつきそうなところを、野うさぎは必死にかわしていた。

「あー、もう！こうなったらしょうがねえ・・・」

そう言くと少年は突然足を止め、目を閉じた。

すると、足下から小さな竜巻のように風が吹きあがり、みると少年を包み込む。

ゴオつと音がして、竜巻が消えたかと思うと、

砂煙の中から現れたのは先ほどの少年の姿ではなく、一匹の黒い狼だった。

そんなことが起こっている間に、野うさぎは生き延びたい一心で山の中をずんずんと進んでいた。

しかし途中で足音が聞こえなくなったのでほっとすると、

近くに見えた小川の畔で休もうとした。

その時だった。

突然後ろから力強い獣の足音が近づいてくる。

野うさぎは驚くと、急いで川に飛び込んだ。

案の定、すぐ後ろからは狼が追いかけてきている。

（よし、捕まえた！）

狼が確信し、川に飛び込もうとしたその瞬間だった。

「まあ、小さなうさぎさん。溺れているの？今すぐ助けてあげるわ」

一人のきれいな衣を着た少女が、そつと野うさぎを川から救い出した。

その様子を見た狼は、飛び出そうにも

なぜかその少女の美しさに目を奪われ、立ち止まってしまった。

艶やかな黒髪を風になびかせ、前髪は上で結ばれ、かわいい髪飾りがついている。

白く輝くその肌はとても美しく、やさしげな瞳で野うさぎを見つめていた。

狼がそつと後ずさりしたとき、小さな小枝を踏んでしまった。

その音で何者かの存在に気が付いた少女は、はつと顔を上げる。

その瞳は狼と交わった。

「あら、かわいい子犬さん。あなたがこのうさぎをいじめていたの？」

「お、俺は子犬じゃない！」

すると、また狼の足下から小さな竜巻が巻き上がり、その体を包んだかと思うと、

砂煙の中からは黒髪の少年が姿をあらわした。

「ハ丸だ。^{はちまる}あと、犬じゃなくて狼な」

その様子を見た少女は、一瞬驚いた様子を見せたが、すぐに微笑みを浮かべハ丸に向き合った。

「ハ丸様ですね。鈴花^{すずか}と申します。獣族のお方でございましたか」

「鈴花、さん・・・あ！今、獣族って・・・」

「あら、だって先ほどまで狼の姿でいらしたじゃない」

「その・・・俺たちの決まりでは、人間に自分の人の姿を見せてはいけないとあって・・・」

ハ丸は思わず口ごもった。

自分でも、どうして今人間の姿に戻ってしまったのか分からなかったのだ。

ただ、少女に子犬と呼ばれたとき、ハ丸は無性に否定したい気持ちに駆られた。

「い、今のは事故だ！事故！」

「あら、そうなんですか？大丈夫です、誰にも口外なんて致しませんのでご安心を」

につこりと微笑むその笑みは、まるでたんぽぽの花のように柔らかな優しさを感じる。

「鈴花と、お呼び下さい」

「俺の方こそ、様だなんて・・・」

「じゃあ、ハ丸さんですね」

山の木々が風にゆられてさらさらと音を奏でる。気がつく二人は見つめ合っていた。

「あつ、それで、この子なんですけども・・・」

急に鈴花の視線が腕に抱かれた野うさぎに移る。

「見逃してあげてはくれませんか？」

「そうは言われても、俺たちの晩飯が・・・」

「殺生などしなくとも、山の木の実や果物を食べれば良いのです」

鈴花のせがむような瞳を見たら、八丸は野うさぎを狩るのがかわいそうに思えてきた。

そして不思議と、彼女の要求に応えてあげたいという気持ちが沸き起こる。

「まあ、元から人の臭いが移った獲物なんて、

怪しがるから持って帰れないしなあ・・・」

「それって」

「と、特別だっ」

「良かった！」

安心した鈴花は、何度か野うさぎの頭を撫でてやると、そっと放してあげた。

すると突然、遠くの方から女の人の声が聞こえてきた。

「鈴花様！どちらにいらっしゃるのですか！鈴花様！」

「いけない、朱音が探しているわ。もういかなくてもは

走り去ろうとした鈴花を、八丸は呼び止めた。

「あの！また・・・会えないかな？」

振り向いた鈴花は驚きの表情を浮かべていたが、すぐに八丸に真っ直ぐ向き合った。

「それでは、またこの小川でお会い致しましょう。

ここですとまたばれてしまいますので、もう少し・・・遠くに見える柳の木の下で」

最後にもう一度微笑むと、鈴花は声のする方へ走り去っていった。

「朱音！私ならここよ」

「あ！鈴花様！いったいどちらへ・・・」

二人の声が聞こえなくなると、八丸は人間の姿のまま、山奥へ走り出した。

途中で木の実を両手にいっぱい採ると、さらに奥へ奥へと進み、二本のイチヨウの木が並ぶところへ出た。

辺りは霧で覆われていて、イチヨウの木と木の間は

よけいに濃い霧でおおわれているので、先が全く見えない。

しかし、八丸は躊躇せずとその木々の間をくぐり抜けた。

すると、不思議なことに、くぐり抜けたとたん霧が晴れ、ひとつの村が現れた。

ここが八丸達、獣族の住む村「霧^{きり}の里」だ。

二、霧の里

ハ丸^{はちまる}が自分の家を目指して進んでいくと、一人の少年が駆け寄ってきた。

「よっ、おかえりハ丸。獲物は捕れたのか？」

「おお、ただいま響炎^{きょうえん}。実は・・・」

響炎と呼ばれたその少年は、輝く金色の髪をなびかせている。

「な、なんだよこれ！木の実ばかりじゃねえか」

「実はとっても素敵な人に・・・」

「これに銀杏とか混ぜてたら殺すぞ、本気で！」

ハ丸の話を聞かずに、響炎は溜息をもらす。

「だ、だから人の話を聞け！このばか狐！」

「ば！ばかってなんだ、ばかって！」

俺は狐は狐でもおまえなんかよりよっぽど優秀だ、ばかはよけいなんだよ、このばか犬野郎！」

「い、犬って言うなこの野郎！ばかはおま・・・」

気がつく二人はお互い狐と狼の姿になり、組み合っていた。

「ちょっと！何やってんのさお前ら！また喧嘩かよ」

二人の騒がしさにうんざりしたのか、

一人の大柄な少年が二人の間に割って入った。

「豚は黙ってる！」

「ぶ、豚だってー！おいらは猪様だあああ！」

そう叫ぶと、少年はぶわつと風の渦に包み込まれ、猪に姿を変えた。

「や、やば・・・」

「おい、八丸！お前が猪雄ししおのこと豚おって言うから・・・」

「先に言っただのはお前だろ、響炎！」

「二人とも、ただじゃすまないぞ！ー！」

「「うわあああああ！」」

「はい、そこまでっ」

さつと一人の黒髪の青年が現れたかと思うと、

猪を右手に、左手で狼の頭を押さえ込んだ。

左分けにされた髪はピンで上にあげ、長く美しい後ろ髪は、
右上でぐつと結び上げられている。

三人よりも年上であろうその青年の顔は、
凛々しく品が漂っていて、とても美しい。

「君らはいっぴになつたらその取っ組み合いをやめられるのかな」

「飛鳥さん・・・！」
あすか

ぶわつと風が巻き起こり、三人とも元の人の姿に戻った。

「飛鳥さん、聞いて下さいよー。」

こいつ、肉とつてこいつて言ったのに、木の実ばかりもいできて・

・・・

「美味しいよ？木の実」

「そんな笑顔で言われてもですねえ・・・」

「俺、鳶だから肉も食うけど、木の実の方が好きだな」

「ほらみる、響炎」

八丸はにやつと響炎を横目で見ると

「でも、おいらも肉食べたかったなあ・・・」

猪雄が残念そうに肩を落とす。

響炎は八丸に向き直った。

「それにしても八丸。」

お前、いつもしっかり獲物三匹くらい捕まえてくるのに、
今日に限ってどうしたんだよ？何かあったか？」

すると、八丸は散らばった木の実を集めながら振り返った。

「だ・か・ら！さっきから話を聞けって言ってただろ！」

「それで喧嘩になつたんだな・・・」

飛鳥が呆れて二人を眺める。

そんな飛鳥の様子を気にせず、八丸は立ち直ると三人に向き合った。

こんなに改まって話をしようとする八丸の様子が珍しかったので、重大な事があったのだと三人は思いこみ、じっと八丸を見つめる。

「会ったんだ・・・」

「誰に？」

「とっても美しい人に・・・この世の人とは思えなかった・・・」

無言の空気が漂う。

「まあたまには木の実も悪くねえ・・・」

「だろ？響炎」

「あー飛鳥さん！おいらにも！」

「お、お前ら無視するなあ！」

三人とも八丸を背にして歩き出したが同時に立ち止り振り返る。

先にため息交じりに口を開いたのは響炎だ。

「何があつたかと思えばそんなことかよ。なんで美人に会つと獲物取れないんだよ」

「あーもしかして捕ろうとした獲物が獣族だった？」

猪雄はぽりぽり頬を掻きながら首をかしげる。

「いいじゃない、恋だねー八丸。」

水の里の子？可愛い子多いって言うよねーあそこ」

飛鳥もにこにこ笑っている。

「ち、違いますよー！そうじゃなくて・・・」

ここで八丸はあわてて言葉を止めた。

“人間”だなんて言ったら、みんなに何を言われるか分かっていたからだ。

（人間は敵。そうだ、あの人は人間だった・・・）

急に心がぐつと締め付けられるような気持ちになった。

「飛鳥さん？どーこの女の子は可愛くないってー？」
いきなり三人の背後にぬつと人影が現れた。

「やあ、葵ちゃん。別に霧の里の子を可愛くないなんて言っていないよ?」

飛鳥はくすぐすつと笑いながら、その少女の頭をぼんぼんと軽くなでる。

「飛鳥さん! 美夜もやってー!」

その少女の陰からもう一人、幼い少女も顔を出した。

耳の下に結ばれた二つ鬚がぴよぴよことその子の体とものはずむ。

「美夜ちゃんもいたんだね」

飛鳥は同様に頭をなでてやる。

「あ、美夜……」

響炎が驚いて美夜に目をむける。

「えへへ、お兄ちゃんもいたあ」

美夜は飛鳥の元からささつと響炎のもとに駆け寄る。

「よう、葵。すまないな、また美夜の世話してくれてたのか?」

「こんにちは、葵ちゃん」

響炎と猪雄も親しげに葵に挨拶を交わす。

「こんにちは、皆さんお揃いで。いいのよ、響炎。ところでこんなとこで何やって……」

葵は三人の後ろからぴょんつと前に出る。高く結ばれた後ろ髪が揺れている。

「あー! 八丸!」

八丸の姿を確認すると指をさして叫んだ。

「げ……葵……」

八丸は一步後ずさる。

「あんたどこ行ってたのよ! わざわざむかえに来てあげたんだから」後ずさる八丸の腕をさつと掴むと葵はぐんぐん歩き始める。

「おい、ちよつと木の実が・・・」

「は？木の実？あんた獲物は？」

「それには訳が・・・」

「言い訳？狼の集落戻つたらたつぷり聞いてあげるわ」

問答無用といわんばかりに八丸は葵に引きずられていく。

「美夜ちゃん、ごめん。またね！」

「ま、またなみんな！」

「「「おーまたな」」」

「ばいばい、葵姉ちゃん！」

呆然と立ち尽くす三人と大きく手を振る美夜を後に、
八丸と葵は狼の集落を目指した。

葵もまた八丸同様、狼の女の子だ。

三、貴族の娘

はちまる
八丸に別れを告げた後
すずか
すぐに鈴花は朱音に会うことができた。

朱音は鈴花の姿を見つけるやいなや、無事を確認すると大きくため息をつき肩を落とす。

朱音の右目の下にある泣きぼくろが、その悲しそうな瞳をいつそう色っぽく感じさせる。

「鈴花様、好奇心が旺盛なのは良いことですが、毎度突然いなくなられては困ります。何かあったのではと思うと、私の気持ちが保ちません」

「あら朱音、まっすぐな前髪が乱れているわよ。大冒険でもしてらしたの?」

くすくすつと鈴花は笑い、朱音の髪を撫でる。

「お、お止めください私なんかに!」

「あら照れなくてよろしくてよ」

「まったく、鈴花様には敵いません・・・」

慎重に獣道を下っていくと、すぐに普通の山道に戻ることができた。

「あちらに牛車を待たせております。早くお屋敷に戻りましょう」
朱音は鈴花の手を引きながら急かす。

「あら、そんなに急がなくても」

「何をおっしゃいます、お忘れですか？」

今夜は鈴花様のお父上様、光晴様みつはるがお見えになるのですよ」

「そう・・・でしたわね」

牛車に乗り込み町へと向かう。

道中鈴花の頭には先ほどの少年のことばかりが浮かんでいた。
ぼーっとしていたのか、朱音が心配そうに鈴花の顔を覗き込む。

「どうかなされましたか？」

「・・・いえ、なにも」

「先ほどから上の空なので」

話には聞いていたが初めてみた獣族だったからだろうか、ずっと胸のあたりがそわそわする。

「光晴様にお会いするのが、不安なのですか？」

「えっ・・・いえ、まあ確かに突然で驚きましたわ」

思考を現実に戻す。

鈴花は貴族の生まれで、一人娘として大切に育てられてきた。

父親は地位のある権力者のひとりで、鈴花や母親とは普段違つところで暮らしている。

そんな父親が先日話がしたいと文^{ふみ}を送ってきた。
その約束が今晚なのだった。

「もうすぐ着きますよ。お部屋に戻られましたら、すぐにお着替えの準備に伺いますね」

「分かったわ」

ガラガラと牛車の車輪の音が町の通りを走り去った。

-
-
-
-
-
-
-
-
-
-
-
-
-

「おお、おお、鈴花！少し見ない間にまた一段と美しくなったな」

男の陽気な笑い声が屋敷中に響き渡った。

「父上もお元気そうだなによりです」

鈴花は軽く会釈を返す。

鮮やかな朱色の着物は、色白の鈴花を一段と美しく見せた。

「お帰りなさいませ、光晴様。ゆっくりしていただけますの?」

隣で母の菊が尋ねる。

「おお、お菊や、お前も相変わらずいつ見ても美しい。むこうの仕事がこう忙しくなければ、ずっとこの美女に囲まれて生活したいものだ・・・」

「あら、もったいなきお言葉ですわ」

ほほほっと菊は口到手をあてて笑った。

光晴の為に馳走が用意された。使用人が数人せわしなく働く中、しばらく3人は食事と変哲もない会話を楽しんだ。

食事が終わると、光晴が話を切り出す。

「ところで鈴花・・・本題に入りたいのだが」

光晴が近くの使用人にちらっと目配せすると、状況を察したのか皆部屋を退室し、部屋には3人だけとなった。

「何でございましょう」

「なに、固くなること無い。ちょっとまたあるお方から縁談をつけてだな」

「縁談、ですか」

「あら良かったじゃないの鈴花」

隣で菊が微笑む。

「なかなかの力をお持ちの方だよ。

金も、地位も、あゝしかも容姿もなかなか美しい好青年ときた！
今回こそは、お前も気に入ってくれると思うんだがね。

・・・と言うよりも、気に入ってもらえないと困るのだよ。

ここだけの話、一番重要なのはそのお方の地位だ。

豪族の人間だぞ？しかもここら一帯を取り締まっている家系だ。
貴族である我が家とつながりができれば、さらに大きなことができる」

光晴は拳を握り語る。

「だが、もちろんわしも人の親。可愛い娘に無理はさせたくない。
鈴花、お前が首を縦に振らなければ無理に結婚させるつもりはあらんよ」

光晴は優しく微笑んだ。

「ありがとうございます、父上。

・・・少し考える時間を頂けますでしょうか」

「ああ、ただ実はもう3日後には面会を申し込まれていてな」

「面会？」

鈴花は意外な展開に思わず語尾があがってしまった。

「3日後ですか！」

菊も驚きの声をあげる。

「いつになく早いお話ですね」

「いきなりはさすがに鈴花を驚かせると思ったのでな。
こうして時間を見つけて話に来たのだ」

光晴は腕を組んでふうつとため息をつく。

「そういう訳で、話は以上だ。よろしく頼むよ鈴花。

さて、そろそろ休ませてもらうとするか。

用意を頼んでおくれ」

そついうと光晴は立ち上がった。

菊がパンパンと手をたたく。すると素早く使用人が現れた。

「すぐに寢床の用意をお願い。

鈴花、あなたももう自分の間に戻って休みなさいな」

「はい、母上。そうさせていただきますわ。

父上もよい夜を。失礼します」

鈴花は頭を下げ部屋を出た。

- - - - -

涼しい風の吹く夜だった。

月が中庭の池に映りゆらゆらと揺れている。

鈴花は縁側の簾をあげ、夜風にあたりながらそんな池を眺めていた。

「鈴花様、お呼びでしょうか」

襖の奥から朱音の声がした。

「お入りなさい」

朱音はすつと襖をあけ部屋に入ると、
鈴花の少し後ろで正座をした。

「どうなさいましたか」

朱音が心配そうに尋ねると、

鈴花は優しく微笑んだ。

「ご覧なさい朱音。月がとても美しいですよ」

「誠に、趣がございます」

朱音は視線を鈴花から月に移す。

「先ほど父上からお話を聞きました。

変わらず元気そうでしたわ。

お仕事は大変みたいですけど」

「光晴様、お元気ならなによりでございます」

朱音はにっこり微笑んだ。

「・・・また、縁談でしたわ」

突然鈴花の表情が悲しそうに変わった。

「それは良いお話ではありませんか」

朱音は明るく鈴花に返す。

しかし鈴花は悲しそうな瞳で月を眺めるだけだった。

「父上のお話だと今回のお相手の方は、今までの殿方以上にすごいお方でしたわ。」

今まで私のわがままで、惹かれない方との結婚は取りやめていただいてきたけれど・・・

今回は、少し我慢をした方が良いのかもしれないの」

鈴花は困ったような笑顔を朱音にむけた。

朱音も少し切ない表情になる。

「きっとよいお方ですわ。」

光晴様がお選びになられたのですから」

「・・・ねえ、朱音」

「はい」

「あなたは恋をしたことがありますか？」

鈴花は朱音を真っ直ぐ見つめ問いかけた。
驚きのあまり朱音はすぐに答えられなかった。

「えっ・・・恋、でございますか？」

「はい」

「そんな、私めが滅相もございません！」

朱音は顔を赤らめ首を横に振る。

「私もありませんの」

鈴花がぼつりと呟く。

「どのような気持ちなのでしょううか。
私は今回の殿方にお会いすれば、それが分かるのでしょうか」

「鈴花様……」

ふわっと心地の良い風が、2人の髪を揺らす。

「不安など、初めてのことにはつきものでございますよ。
もう夜も深いです、今夜はもうお休みになられた方がよろしいか
と。」

お体にさわれます」

「ありがとうございます、朱音。おやすみなさい」

庭の虫たちの鳴き声と山の獣の遠吠えが、
夜風にのって空に響いていた。

四、鹿の少女

「ひとつ、ふたつ・・・」

暗い洞窟に、幼い少女の呟く声が響く。

「みつつ、よつつ・・・また、命が連鎖していく」

少女はかがみこみ、数えながら足元の小石を積み上げた。

「どうかなさいましたか」

洞窟の入り口から女の声がした。

「アサ、ミサ」

少女が呼ぶと、二人の背丈も顔もそっくりの赤い袴をきた女が少女の傍による。

「花を奉っておくれ。両手いっぱい、彼岸花を・・・」

- - - - -

はちまる
八丸は相変わらず葵あおいに手を引かれて歩いていた。

「なー！なんでそんな急ぐんだよ」

「よし婆のこのきい坊が大変なの！」

「なんだって？」

「熱が出て、まだ若い雄が誰も戻らないからこうやって私があんたを探しにきたんじゃない」

「お前、そういうことは早く言えよ！」

急に八丸の目の色が変わる。

「えっ？」

「走るぞ！」

ぱつと葵の手を振り払うと、八丸は駆け出した。

「ちよ、待ちなさいよ！」

葵もすぐに追いかける。

いくつもの集落を越えていくと、小さな岩山が見えてくる。

その禁に位置する所が狼の集落だ。

集落に近づくと、八丸はスピードを落とした。

「葵、きい坊どこだ？」

「よし婆の家に・・・あ！いたいた！」

おーい！よし婆！八丸呼んできたよー！」

葵は手を振りながら、一人の老人のもとへ駆けていく。
八丸もそれに続いた。

老人は家の前をおろおろしながら歩き回っていたが、
二人の姿を確認すると、嬉しそうに手を振りかえした。

「おー葵！早く早く！八丸もいいところに帰ってきてくれたのう」

「きい坊は？」

「中で横にさせている、ひどい熱じゃ」

二人は小さな家にあがり、

弱々しく横たわっている一匹の子狼の元にかがみ込んだ。
息が荒く、とても苦しそうだ。

「きい坊！おい、きい坊！」

八丸が子狼の耳元で呼びかける。

「う・・・八丸、にい・・・ちゃん？」

子狼がうつすらと目を開けて答えた。

「今日のお昼に急に具合悪くなったの」

葵が隣できい坊の体を優しくさする。

よし婆も心配そうにのぞきこむ。

「二人とも、この子を早く山神様のもとへ連れて行ってやっておく
れ。」

「お願いだよ。儂じゃあとてもあそこまでこの子を運べぬ」

「ああ、もちろんだよし婆」

「行きましよう、八丸。山神様なら治してくださるわ。」

「きい坊、大丈夫だからね」

八丸は手に持っていた木の実を置くと、

ゆっくりきい坊の体を起こし、背中に背負った。

「背負いにくいな・・・きい坊、少しだけ人型になれないか？」

「・・・頑張るっ」

ふわっと優しい風とともにきい坊の姿が人の子供の姿に変わった。
しかし、薄茶色の髪からは狼の耳が出ていて、尻尾も、手足の先も

狼のままだ。

「十分だきい坊。よし、行くぞ」

「これで勘弁してくれるかのう」

よし婆は黄色い山花の花束を葵に渡した。

「供え物には十分よ。行ってくるね」

二人は家を飛び出し、まっすぐ岩山へと向かった。

岩山の奥の滝を越えたところにある洞窟。

そこが山神の奉られている場所だ。

その途中には鹿の集落があり、不審な者が山神の所に近づかないよう警備している。

山神は代々、鹿の獣族から誕生するのだった。

八丸たちも案の定、まずは鹿の集落で足止めされる。体格の良い若い2人の槍を持った男が八丸に歩み寄った。

「山神様へ用があります」

八丸はそう言くと、背負っているきい坊を男たちに見せた。相変わらず熱に侵され、苦しそうに喘いでいる。

「病人か？ よろしい、早く連れて行ってやりなさい」
そう言つてすんなりと道をあけてくれた。

またしばらく駆けていくと大きな滝に出た。

「あそこだな」

いよいよ山神の奉られている洞窟は目の前だ。
葵が頷き答える。

「山神様にしか、私たちの怪我や病は治せないもの。
本当に不思議で素晴らしいお力よね」

「さあもうちよつとだ、頑張れきい坊！あと少しだぞ」
八丸と葵はきい坊を励ましながら滝をくぐりぬけ、洞窟にたどり着いた。

洞窟はとても大きく開いており、奥行きも深い。

中へ入ると天井も高く、風が吹き込むたびにごおつと音がする。
あちこちに木の実の殻や石などで作られた飾りがぶら下がっており、
風でからからと音を鳴らしている。

少し入っていくと、二人の赤い袴姿の美しい女に迎えられた。

「アサさん、ミサさん」

葵が八丸の前に出て二人に話しかける。

二人の女は顔が瓜二つで、唯一違うところは長い髪を束ねている方向だ。

「葵様に八丸様ですね」

右側に髪を結んでいる女が答えた。

「あの・・・」

二人の女は同時に八丸の背中のきい坊へちらつと目を向けた。
そして互いに顔を合わせると再び葵と八丸に向き直った。

「山神様はもう状況を存じられております。どうぞこちらへ」

二人の女に誘導され、さらに洞窟の奥へと進んでいく。

暗い洞窟の中は、ところどころに松明が灯っているので完全な闇ではない。

ある程度暗くても、獣族の目にはこの程度の松明で十分だった。

すると、大きな木を組んだ上から植物を編んで作られた

簾のようなものが垂れ下がっているものが見えてきた。

その前にはたくさんの供え物であろう花や食べ物が置いてある。

飾り物の数も増え、小さな鈴の音もちりんちりと聞こえる。

この簾の奥に、山神がいるのだ。

（いつきても不思議な場所だ）

八丸は目をきよるきよると動かしだした。

トン、トン・・・と、小石のぶつかる音が響いている。

「山神様、先ほどおっしゃっていた三人が見えました」

「雌狼の葵、雄狼の八丸、雄狼の少年・・・」

「あ、きい坊と言います。初めてですね」

葵が慌てて付け加えた。

こつん・・・

石のぶつかりあう音が止まった。

「・・・やはり、あの気配は葵に八丸だったのだな」

細く可愛らしい少女の声が聞こえてきた。

「ミサ、開けておくれ」

左に髪を束ねた女がずっと簾を上にあげる。

そこには小さな少女が敷物の上に正座をしていた。

肩まで長さがあるおかつぱ頭の左上には大きな牡丹の花のような髪飾り。

桃色の綺麗な着物に身を包んでいるこの少女こそ、
獣族の奉っている唯一の存在である山神だ。

五、治癒能力

「こんにちは、山神様」

葵が挨拶をして、八丸も頭あおい はちまるを下げる。

「こいつが、すごい熱なんです」

八丸はきい坊を背中からおろし、そつと山神に近づいた。

「少年をそこへ」

山神に言われるまま、八丸は少し手前にきい坊を寝かせる。

葵も心配そうに見守っていた。

「よかった、今日はまだ私にも救える命が残されていた・・・」

そう呟くと山神は立ち上がり、苦しむきい坊に歩み寄った。

両手をそつときい坊の体にかざす。

山神が瞳を閉じ、沈黙が流れる。

するとコオオと小さな音とともに、緑色の光がきい坊を包んだ。

きい坊の顔色はみるみる良くなり、荒い息遣いも落ち着いていく。

山神が再び目を開き、かざしていた手をはなすと、

きい坊もゆっくりと目を開いた。

「・・・あれ、苦しくない・・・」

「きい坊！」

「よかった！」

八丸と葵は安堵の喜びの声をあげる。

「お疲れ様です、山神様」

アサとミサが声をそろえて言った。

「すごい！体が楽だよ、八丸兄ちゃん！葵姉ちゃん！」

きい坊は立ち上がり、山神に向かい深々と頭を下げた。

「ありがとうございます！山神様！」

きい坊の顔には先ほどまで熱に侵されていたとは思えないほどの元気な笑顔が浮かんでいる。

「この程度、私にかかればどうってことはない」

「いつみてもすごいな、山神様のお能力は」ちから

八丸は元気なきい坊を眺めしみじみと呟いた。

「山の民を守るのが、この能力と共に山神に与えられた宿命だからな」

「あの、代価はこれでよろしいでしょうか」

葵はアサによし婆に渡された黄色い山花の花束を差し出した。

「十分でございます。頂戴しましょう」

アサは受け取ると花がたくさん並んでいるところにその花束を置いた。

八丸は改めて洞窟の中を見渡した。

あちこちに小石が四つ、五つ縦に積まれたものがいくつもある。

「あの、この石の山は・・・」

「亡くなり、連鎖していく命の数だ」

山神は八丸に答えた。

「今日はよつつの命を・・・救うことができなかった」

ぽつりと悲しそうに呟く少女の声は、洞窟の中で反響する。

「お前を救えてよかったぞ。きい坊と言ったな。体を大事にするがよい」

にこつと目を細めて笑ったその表情は、幼い少女とは思えない上品さを帯びていた。

「本当にありがとうございます、山神様。八丸、そろそろ失礼しましょう」

「そうだな、葵。帰るぞきい坊。山神様、ありがとうございます」
再び葵と八丸は山神に頭を下げる。

「では、入り口までまたご案内します」

来た時と同じように双子に案内され、三人は洞窟を出た。

滝をくぐったところで、突然こちらにむかって指をさしている子供の姿が見えた。

「あ！葵姉ちゃんに、八丸兄ちゃんだ！それにきい坊も」

「美夜ちゃん！どうしたの？山神様のところへ？」

「うん！」

「どうした？怪我か？」

八丸は心配そうに美夜を眺めたが、どこも悪いところはなさそうだ。

「そうじゃないんだけどね」

美夜は腕に抱えた果物のかごに目を向けた。

「お供え物っ」

にぱつと無邪気な笑顔を向ける。

「そうか、気を付けてな」

八丸はそつと美夜の頭を撫でた。

「じゃあね！」

三人に別れを告げて、美夜は滝をくぐっていく。

「よし、俺達も早く集落に戻ろう。よし婆がきつと心配している」

「うん！僕お腹空いちゃった。」

帰って八丸兄ちゃんが獲ってきた野うさぎ食べたいなあ」

「きい坊・・・そのことなんだが・・・」

「そういえば、あんたの言い訳早く聞かないとね」

「言い訳なんて！」

三人は谷を下り、狼の集落を目指した。

六、秘密の友情

「山神様っ！」

美夜^{みよ}は洞窟に向かい明るく呼びかけた。

「美夜か？」

山神の弾んだ声が洞窟に響く。

「美夜様、またこんなにたくさんの果物を」

ミサが微笑みながら美夜から果物のかごを受け取った。

「山神様に食べてほしくて」

「どうぞこちらへ」

山神は美夜を見ると嬉しそうに微笑んだ。

「よく来たな、美夜」

「山神様、おいしい果物いっぱい捕れたから持ってきたんだよ」

ミサは山神の側に果物のかごを置いた。

「ありがとう、ミサ。アサも、二人とも入り口に戻っていてよいぞ」

「ですが・・・」

「戻れと言っているんだ」

山神に逆らうわけにもいかず、

双子は少し戸惑いながらも洞窟の入り口に戻った。

「美夜、また話を聞かせておくれ」

二人の少女は並んで敷物の上に座った。

「うん！あのね、山神様・・・」

「おい、約束を忘れたのか？」

「あ・・・でも」

「大丈夫だ、アサもミサも入り口に戻っている」

「・・・うん」

「2人の時は？」

「紫苑^{しおん}、って呼ぶんだよね？」

「ああ、名で呼んでおくれ」

山神は柔らかな笑顔を美夜にむける。

「アサもミサは何度言っても呼んではくれぬ」
はあ、とため息と共に肩を落とした。

「時々、己の名を失いそうで怖くなるんだ」

視線を下に落として呟く。

「紫苑！美夜は呼ぶよ」

美夜は山神の手を取り笑顔で名を呼んだ。

山神の、鹿の少女としての名を。

「美夜・・・」

「ねえ紫苑聞いて。今日はねっ」

美夜は自分の出来事を話し始めた。
村のこと、新しい遊びのこと、兄のこと。
それを山神、紫苑は楽しそうに耳を傾け聞いていた。

「美夜はすごいな、何でも知っている」

「そんなこと無いよ。すごいのは紫苑だよ。」

この山の全てを見ているでしょ？」

「正しくは見ているのではない、感じるのだ。
個々の生命の灯ともしびをな」

「美夜のパパとママが死んだときも、紫苑が教えてくれたからすぐ見つけて埋葬できたんだよね」

「・・・人は、命の連鎖を無視する存在だ」

紫苑は小さな拳を力いっぱい握りしめた。

「ごめん！暗いお話になっちゃったね！」

美夜は慌てて笑顔を作った。

美夜の父親と母親は数年前、
人間の狩人に打たれて命を落とした。
その狩人は残酷にも、両親の美しい金色の毛皮だけを剥ぎ取り、
その身をまた山に捨てていったのだ。

「でもね紫苑、美夜には大好きなお兄ちゃんもいるし、
お兄ちゃんのお友達も狐の集落の人たちもいるでしょ。
それに紫苑もいるから、寂しくなんかいないだよ」
美夜はふわりと紫苑に微笑んだ。

「美夜は優しさに恵まれているな。とても羨ましい・・・」

私はここでいつも1人だ。　　こうして美夜が訪ねてくれることが
唯一の楽しみだ」

「紫苑・・・」

紫苑は天井を見上げた。

高く上まで続いているが、空の光が入ることのない岩の塊。

美夜は紫苑の様子を隣から伺っていた。

不意に紫苑が口を開く。

「・・・私は、ここを抜け出したい。」

そして美夜のように、山や村を駆けて遊びたい」

「でも・・・紫苑が、山神がいなくなったらみんなが・・・」

「分かっておる！ここから出ることは許されない」

紫苑は美夜に笑いかけた。

けれど、その笑顔は悲しみに溢れていて、

美夜はただ切ない瞳で見つめ返す事しかできなかった。

「分かっておる。でも、それでもいつか・・・」

「いつか一緒に、山で遊ぼう！」

二人は顔を合わせて微笑み合う。

そして、互いの右手の小指を絡めててぎゅっと力を込めた。

「約束だ」

「約束だよ」

二人の少女の無邪気な笑い声が、洞窟いっぱいに響き渡った。

七、再会

清々しい朝だった。

ハ丸は人の姿で朝日の射し込む山道を歩いていた。
大きく深呼吸をすると、胸いっぱい澄んだ空気がすーっと入ってくる。

「・・・いい気分」
ひとりでに笑顔が浮かぶ。

ハ丸の心は弾んでいた。
ただ場所のみの口頭の約束を交わした少女に、
何の根拠もなく会えるような気がしていたのだ。
ハ丸の頭は昨日から少女のことではいっぱいだった。

（鈴花、^{すすか}といっていたよな）

何度も心の中でその名を繰り返しながら山を下りていく。

（鈴花、鈴花・・・素敵な名だ・・・）
容姿に似合いの可愛い響き。

気がつくと、八丸は昨日の小川にたどり着いていた。

約束の場所である、大きな柳の木を目指して川にそって歩いてゆく。小鳥のさえずりが聞こえるだけで、他の獣の気配すら感じない。

「当たり前だよな、こんな朝早く・・・」

誰かいる方がおかしい。

いくら待ちきれないからといっても、先走り過ぎたようだ。

八丸は腰をかがめ、透き通る小川の水で顔を洗った。

「・・・つばあーきーっもちーい！」

バツと顔を上げ、ぶるぶるっと水を振り落す。

その時だった。

八丸の視線は、向かい岸にいる少女の大きな瞳と交わった。

驚きのあまり声も出せず、思わず見とれてしまう。

そよそよと風にゆれる鮮やかな黒髪。

木漏れ日できらきらと輝く髪飾り。

そこにいたのは、まさに昨日出会った少女、鈴花だったのだ。

「あの・・・」

「わっ！」

困ったような鈴花の声で、八丸は我に返った。

「あ、あんたは・・・昨日の・・・」

「鈴花でございます」

鈴花の表情がやわらかな笑顔に変わる。

「やはり、八丸さんでしたか」

「俺の名、覚えていてくれたのか」

「当然でございます」

八丸は胸にこみ上げる喜びをおさえきれず、つい顔がほころんだ。

「あの、そちらに行きたいのですが・・・」

鈴花はおろおろと小川に目を向けた。

二人の間を流れる小川の幅は、鈴花が渡るのは難しそうだ。

「いや、俺がそちらへ行く」

そう言くと、八丸は軽々と小川を飛び越え鈴花の横に着地した。

「すごいですわ!」

「いや、こんなの俺たちにしてみたらどうってことない」

八丸は少し照れくさくなり、右手の人差し指で頬を掻いた。

二人は大きな柳の木陰に並んで腰を下ろした。

八丸はちらつと鈴花の横顔に目を向ける。

鈴花も八丸の気配に気づき、顔を向けた。

先ほどよりも近い距離で視線が交わる。

近くで見る鈴花の瞳は、吸い込まれてしまいそうなくらい黒く澄んでいた。

「どうかなされましたか?」

「あつ、いや、その・・・」

鈴花の微笑む口元、小首を傾げるしぐさ。

そんな些細なことで胸が高鳴り、思わず視線を逸らす。

八丸は自分の顔が赤らんでいるのが分かった。

（近くで見れば見るほど美しい・・・）

八丸は再び鈴花へ目を向ける。

なんだか向こうもそわそわしているような気がした。

会いたいと言ったのは自分であつたと思ひ出し、八丸は口を開いた。

「まさか今日、・・・しかもこんな早い刻に会えるとは思わなかった」

「私も驚いております。この時間でないと厳しかったので、お会いできて嬉しいですわ」

鈴花の微笑みに、八丸も今度は笑え返す。

「でも、どうしてこんな朝方だと来れたんだ？」

「私の付き人が、朝は忙しいので私の傍を離れるのです。」

その隙に抜け出してまいりました。今頃向こうは大騒ぎでしょうね」

鈴花はくすくすつといたずらっぽく笑った。

「だ、大丈夫なのか？」

八丸の心配とは裏腹に、大丈夫ですわ、と余裕な表情を見せる。

「日の高くなるころに戻れば問題ありません。」

昔から一人で出かけることが好きなので、今では呆れられてしまいます。

とても心配はかけているみたいですけどね」

「じゃあ、あんたはやっぱり身分の良い家柄の娘なんだな」

「父上が、それなりの方なだけでございます」

「人間は、貴族は何をしているんだ？」

「特に特別なことはないと思いますけど・・・」

鈴花は顎に指をあて少し悩むと、突然ぱつと笑顔を八丸に向けた。

「八丸さんは、何をして過ごしているんですか？」

「俺？俺は・・・基本的に狩りをしたり、

里の子供たちの相手をして遊んで過ごすこともよくあるな」

「まあ！それは楽しそうですね。」

子供と触れ合う機会なんてありませんから、羨ましいです」

「威勢が良すぎて大変だぞ、狼の子は！」

「ふふっ、人の子より大変かもしれませんね」

二人は笑いあい、質問を投げかけあいながら会話を楽しんだ。

八丸にとって鈴花の話することは全てが新鮮で珍しく、とても刺激的なものだった。

七、再会（後書き）

相変わらず更新不定期ですみません。

お気に入り登録してくださった方、評価してくださった方、
本当にありがとうございます！喜びでいっぱいです！
これからも読んでいただけるよう頑張ります。

八、獣族と人間

柳の葉が風に揺られて、さらさらと音を奏でている。
八丸は空を見上げた。

「俺、人間と話をしたのは初めてだ」

「私も、獣族の方とお話したのは初めてです。お会いしたのも」

「俺達は、人間を見つけたら逃げるように幼いころから言われてきているから。」

よほどのことがない限り人前には姿を見せないんだ」

「なぜ、逃げるのです？」

「え？なぜって・・・」

八丸は驚いた表情で鈴花を見た。

鈴花は八丸がなぜ驚いているのか分からないようで、ただ首をかしげている。

「・・・敵だからだ」

「敵？」

八丸は真面目な顔で頷いた。

「人間は、獣族にとって危険な存在だ。」

見境なく俺たちを野蛮な道具で殺そうとする」

語尾につい力がこもる。

「実際に、何匹もの仲間が殺されてきた。

獣族は狩りをするが、むやみな殺生はしない。

ちゃんと自然の、命の連鎖に従って生きているんだ。

人はそんな自然の秩序を乱そうとする」

「では・・・私も敵なのですね」

「えっ？」

鈴花は視線を下に向けている。

口元は微笑んでいるが、悲しそうな声だった。

その様子を見た八丸は、たまらなく胸が苦しくなった。

「違う！・・・鈴花は、敵じゃない」

「なぜです？私も人間ですわ」

「けど・・・鈴花は山に来る野蛮な人間とは違う」

「なぜ言い切れるのですか」

「鈴花は・・・特別だ」

「特別ななんかではございません」

鈴花は顔をあげ、まっすぐな瞳で八丸を見つめた。

八丸は返す言葉がなく、ただ見つめ返す。

「それが人間なのです」

「え？」

「確かに、八丸さんが述べたように野蛮な者もいるかもしれませんが。

けれど殺生を好まない人間だっております。

生き物を愛し、自然を愛する。

純粋な心をもった、良い人間だっただけなんです。
だからどうか、人間を全て敵だと思わないでください」

鈴花はふわりと微笑んだ。

その笑顔に、八丸は頷いた。

「・・・俺は、狼だ。だからまだ、すぐに人間を信じることは無理だ。

けど、鈴花のことは・・・信じてみたい」

「八丸さん・・・」

「だいぶ、日が昇ったな」

八丸は足元に目を向けた。

木陰が小さくなっている。

鈴花は空を見上げ、慌てて立ち上がった。

「大変！もう戻らなくては」

八丸も立ち上がる。

「禁まで送るよ」

「ご心配なく。独りで来れたのだから、帰れますわ。

それに、私と・・・人間といるところがお仲間の方に見られては、大変なのでは？」

「・・・言うとおりだ」

八丸は肩を落とした。

「とても楽しかった。ありがとう」

八丸は鈴花に微笑んだ。

「私もでございます」

「なあ、また会ってもらえないか？」

「私も、今同じことを考えておりました」

鈴花も微笑む。

「ただ、連日は厳しいので、三日後でもよろしいでしょうか？」

「もちろん！じゃあ、三日後に」

「再びあの柳の木の下で」

「朝、でいいんだな」

「はい、今日と同じ頃に」

「じゃあ、待ってるな」

「それでは」

鈴花は八丸に頭を下げると、
急ぎ足で山を下りていった。

八丸は鈴花の後ろ姿を見届けた後、
ゆっくり来た道を引き返した。

（次は三日後・・・）

今までにない興奮が体中に溢れてくる。

軽やかな足取りで山に入っていくと、
あっという間に霧の里に着いてしまった。

九、甘い香り

八丸は里に踏み込み、はつと気づいた。
今日も獲物を一匹も捕らえていない。
さすがに二日も獲物無しは厳しいと思い、山へ引き返そうとしたときだった。

「よう、八丸。何してんだ？早く入れよ」

山側から声をかけてきたのは、人の姿の響炎きようえんだった。

「よう、響炎・・・」

八丸は言われるがままに里へ入ってしまった。

響炎の腕には四匹の死んだ大きな山鼠が抱かれていた。
八丸の視線に気づいた響炎は、得意げな笑みを見せる。

「今日の獲物勝負は俺の勝ちだな。

お前は・・・？」

響炎視線が八丸の全身を走る。

「なんだよ、もしかして一匹も無しか？

朝から姿が見えないから、てっきり狩りに行ったと思ってたぜ」

響炎は呆れた素振りだと肩を落とす。

「ちょっと空気が気持ちよかったから、散歩に行ってたんだ」
八丸はさらりと嘘を言った。

そして慣れない作り笑いをむける。

すると突然響炎は、ん？と顔をしかめた。
そして八丸に近づき、鼻をひくひく動かした。

「お前、なんだか甘い匂いがするぞ」

響炎の隠し事を探るような目つきが、八丸の全身に突き刺さった。
どきっと鼓動が高鳴る。

きつと鈴花の近くに座っていたから、
鈴花から香っていたお香のような匂いが八丸にもうつったのだろう。
それしか考えることができなかった。

「・・・あ、ああ」

思わず言葉に詰まる。

響炎は不思議そうに首を傾げ、八丸の返事を待っている。

「さつき・・・山ツツジのたくさん咲いているところで昼寝をして
いたんだ。」

その時に香りがついたのかも！」

八丸はへへつと笑ってごまかした。

「ふーん・・・」

響炎はまだ納得がいかないのか、首を傾げて鼻をひくひくさせている。

「昼寝して獲物取り忘れるなんて、やっぱりバカ犬だなっ」

響炎はハハつと笑う。

「なっ！余計なお世話だ！」

八丸は響炎につかみかかろうとしたが、響炎はそれをするりとかわして里の方へ走り出した。

「俺はお前の相手してらんないの！」

美夜が腹空かして待ってるから。じゃあなー」

軽く手を振り走り去る響炎の背中を見届けてから、八丸は狩りのために、再び山へ引き返した。

- - - - -

八丸は山うさぎを二羽捕まえて、狼の集落へ戻った。
日はだいぶ沈んでおり、当たりは薄暗く、
多くの狩りへ出ていた狼たちも帰ってきていた。

「ただいまっ」

「あ！八丸兄ちゃん！」

八丸が家に入ると、子供が三人駆け寄ってきた。

狼の集落では親戚は皆固まって暮らすことが普通だ。

この子供たちも八丸とは直接血のつながりはない、叔父や叔母の子供だ。

「今日はうさぎ二羽！」

八丸がうさぎを掲げてみせると、子供たちは嬉しそうにはしゃぐ。

「さすが兄ちゃん！」

「狼一の狩り名人！」

八丸はそんな子供たちをなだめて家の奥へ入っていった。

木の造りで、床は砂地に藁が敷き詰められている。

所々に腰かけるための丸太が置かれていて、家の中央には囲炉裏いろりがある。

火はついていないそれを囲んで、男が四人座って談話していた。

八丸に気づき全員が顔を上げる。

「おかえり、八丸」

四人の中の一番若い男が声をかけてきた。

八丸の実の兄である七弥^{ななや}だ。

黒毛で短髪の爽やかな雰囲気^{ななにい}の青年である。

「ただいま、七兄^{ななにい}」

八丸は捕まえてきたうさぎの骸を藁の上に置いた。

「八丸・・・お前なんか甘い匂いするぞ？」

「えっ？」

八丸は、先ほどの響炎の時と同じ感覚に再び襲われた。

「・・・山ツツジの近くで昼寝をしていたんだ」

「へえ、山ツツジねー」

七弥の視線がゆっくりと八丸の全身を這う。

「まあ、お前も座れよ」

「あ、ありがとう」

八丸が七弥の隣に腰を下ろそうとした時だった。

「・・・おい、人くせえなあ」

正面に座っていた、叔父の伍雨いづが突然呟いた。
右頬にある深い傷跡が特長だ。鋭い目つきで八丸を睨みつける。

八丸は思わず怯んでしまい、動けなくなった。
他の男たちも伍雨の言葉で鼻を動かす。

「ん？言われてみれば・・・」

「確かに、臭うな・・・」

（バレた・・・っ！！）

やはり大人の鼻はごまかせないのか？
そう覚悟を決めた時だった。

「おめえ、ヒトを食ったのか？」

「えっ？」

八丸に突き刺さった伍雨の言葉は、あまりに予想外のものだった。

十、狼の本能

四人の男の視線が痛かった。

八丸は伍雨ごりゅうの言葉に啞然とし、立ち尽くしていた。

すると突然、男たちは笑い出した。

「そうか！お前もとうとうヒトを食ったか！」

「なんだよ、独り占めするなよー」

「八丸も大人の仲間入りだな」

男たちは一斉に八丸はちまるに話しかける。

八丸は全く話についていけず戸惑戸惑っていた。

すると、その様子に気づいた七弥ななやが八丸の服の裾を引っ張った。

八丸はそこでようやく腰を下ろすことができた。

「七兄、おじさんたちが言ってるのって・・・」

「あー、お前分かってないんだな」

そいつはいけねえと、叔父たちも身を乗り出した。

「ヒトは子供の食うもんじゃないからな」

隣に座っていた叔父の六平ろくへいが八丸の肩に手を置いた。

「なんで？」

「なんでって、そりゃうまいからだよ。」

そこらの痩せた動物よりも肉がやわらかい。
特にヒトの女は最高さ。

女の死体を見つけたときの気分といたら、最高だぜ！」

「ただ、ヒトをやたらに求めちゃいかん」

七弥の向こうから、父の四芭しほが話に入ってきた。

「子供の頃に人のうまさを知ると、

欲求に駆られて人里まで降りて行きかねないからな。

それに、大抵山にくる人間は恐ろしい武器を使っている
だろ？

だからむやみにヒトに近づいちゃいかん」

「まあ、そういうわけだ」

伍雨は不敵に八丸に笑いかけた。

「分かったらおめえもガキどもに勧めてくれんなよ」

八丸は少し大げさに笑って見せた。

「ああ、そうだったのか！分かったよ。

それと、今度見つけたらみんなの分も持って帰るな」

笑いながら立ち上がる八丸を、七弥は心配そうに見上げる。

「八丸？」

「ちよつと水浴びてくる。

家で臭ってちゃみんなに悪いからさ」

「夜風で冷えるぞ、風邪ひくなよ」

「おう」

八丸は軽く手を上げ答えると、家出た。

- - - - -

「・・・つぶはあ！気持ちいい！」

ザバアッと水の流れる音が静かな夜の山に響いた。

八丸は体をぶるぶるっと震わせ水を落とし、川から岸へ上がる。

布で残りの水滴を拭き取り、服を着た。

体を優しくなでる夜風は、春先にもかかわらず、まだ冷たかった。

八丸は川を後にすると、家ではなく、岩山を目指した。

鹿の集落へ行く途中にある険しい崖の上に、

大きく平らな岩があり、そこから集落が一望できる。

八丸のお気に入り場所だった。

岩の上に立つと、八丸は大きく深呼吸をして空を眺めた。
満天の星空が広がっている。

八丸は、そのまま上向きに寝転んだ。

空気が澄んでいるため、星の一つ一つがまぶしいほどに輝いている。

「・・・きれいだ」

輝く星を見つめながら、八丸は鈴花^{すずか}のことを思い出した。

（・・・本当に、美しい人だった）

鈴花の隣で感じた胸の高鳴りが、再び八丸の中に湧き起こる。

その時、先ほどの叔父たちの言葉を思い出した。

『おめえ、ヒトを食ったのか？』

『特にヒトの女は最高さ』

『女の死体を見つけたときの気分といったら、最高だぜ！』

頭の中で、何度も何度も繰り返される。

（俺は、確かに鈴花を見て気持ちが高ぶっていた・・・）
鈴花といた時の気持ちは、八丸にとって初めての感情だった。
そして今も、胸の奥がぎゅっと苦しくなる。

(・・・俺は、彼女を食料として見ていたのか?)

『特にヒトの女は最高さ』

自分の抱いた感情が、叔父の言葉と重なる。

八丸は、彼女をそのような目で見ていたとは考えたくなかった。
しかし、それが狼としての本性だと思うと、さらに胸が苦しくなる
のだ。

「あー！くそっ！」

苛立ちに耐え兼ね、大声で叫んでみたが
すつきりするわけでもなかった。

体を起こし、ため息とともに首を垂らしたその時だった。

「八丸？」

思わず名を呼ばれ、体がびくつと反応する。
声のした方へ目をやると、人影がゆっくり近づいてきた。

「やっぱり、八丸だ」

聞きなれた少女の声に、八丸は安堵のため息を漏らした。

「葵^{あおい}か。びっくりさせんなよ」

月明りで次第に顔もはっきり見えてくる。

「あは、ごめんごめん」

葵は笑いながら八丸の隣に腰を下ろした。

「驚かすつもりは無かったんだけどさ」
にこつと優しく微笑む葵の顔を見ると、

八丸は、先ほどまでの苛立ちが徐々に静まっていくのを感じた。

「どうしたんだ？こんな時間に」

「星がきれいだったから、散歩。」

「あんたこそどうしたのよ？」

「・・・ん、ちよつとな」

「・・・悩み事？」

八丸はただ無言で視線を落とした。

「八丸のくせに、珍しいー！」

「なんだよ、悪いかよ」

そんな八丸を、葵はくすつと微笑み優しく見つめる。

「あんた、昔っから何かあるとここに来てたもんね」

「・・・」

「何年一緒にいると思ってんのよ」

葵はそつと八丸に近づいた。

肩と肩が軽く触れる。

八丸が顔を向けると、葵は正面を向いたまま、少し照れくさそうに呟いた。

「私がついてるじゃない」

そんな葵を見て、八丸は胸の奥が温かくなるのを感じた。
自然と笑みがこぼれる。

「・・・ありがとう」

「・・・何よ」

「うん。元気出た」

「私、何もしてないんだけど」「いいから、ありがとう」

八丸は立ち上がり、戸惑った表情の葵の頭を軽くぽんぽんと撫でると、

ぐっと体を伸ばした。

「あー！何か馬鹿らしくなってきた！」

「何がよ？」

「俺、獣族だもんな」

「当たり前じゃない、何馬鹿なこと言ってるのよ」

「なあ、葵」

ん？つと葵は首を傾げて八丸を見上げる。

「・・・恋って、なんだろうな」

「はあ!？」

葵は目を見開いて、拍子抜けた声を出した。

「なんだよ、その顔」

八丸がけられらと笑うと月明りに照らされた葵の顔が、次第に赤くなった。

「・・・そんなこと、私に聞かないでよ」

膝を抱えて座り直し、

口元を膝に埋めながらごにごによと呟いている。

「なに？」

「な、なんでもないわよ！」

声を大きくして葵も立ち上がる。

「何慌ててんだよ」

「慌ててなんかない」

「葵も恋を知らないのか？」

「し、知ってるわよ、恋くらい・・・」

「どんな気分なんだ？」

「・・・そうね、ドキドキする・・・」

葵は足で地面をいじりながら答える。

「その人のことばかり考える」

「ふーん・・・」

「それで、胸が苦しくなる」

「・・・それってさあ」

八丸は真面目な顔で葵に向き直った。

葵は大きな瞳で八丸を見つめ返す。

「・・・食欲とどう違うんだ？」

「・・・・・・は？」

夜風が二人の間を吹きぬけた。

葵はわなわな震えだすと、ついには腹を抱えて笑い始めた。

「あはは！何その質問！ははっ！」

「な、真面目に聞いているのに、笑うことないだろ！」

八丸は恥ずかしくなり顔が熱^{ほて}る。

「だって・・・ふふっ、何で恋と食欲が一緒になるのよ」

葵は相変わらず笑いをこらえようとしている。

「だって、うまそうなもん見ると嬉しくなっ

ドキドキして、そのことで頭がいっぱいになるだろ」

「あーもう、氣い抜けちゃった」

一生懸命説明しようする八丸の話を聞き流して、

葵はくるりと背を向け、集落に帰ろうとした。

「おい、まだ話の答えは・・・」

「もう今夜は遅いし、また今度ね」

「今度って・・・」

「あのね、八丸」

葵は八丸から離れたところで再びぐるりと振り向いた。
目を細め、にこりと微笑んだ。

「恋は自然に始まるんだよ」

「し、自然と？」

八丸の頭が葵の言葉の意味を理解する前に、
葵は手を振り去って行ってしまった。

一人呆然と立ち尽くす。

八丸は再び空を見上げた。
来てすぐに見上げた空よりも、さらに星の光が眩しく見えた。

「・・・自然と」

八丸は胸の奥で何か熱くなるものを感じた。

「・・・帰ろっか」

帰り道、八丸の頭は、

朝の鈴花の笑顔でいっぱいだった。

十、狼の本能（後書き）

長い間放置しておりました、久々の更新です。

私情の忙しい時期が過ぎたので、

また更新頑張りたいと思います。

今後もし不定期な時もあると思いますが、

よろしく願います！

また、今回の話から少し残酷な描写を含み始めましたので、

「残酷な描写有り」の警告をつけました。

話が進むごとに出血シーンや多少グロテスクな描写が多くなると思いますので、

以後の観覧に関してはあらかじめご了承ください。

十一、豪族の男（前書き）

2011/12/12

大幅に訂正を行いました。

十一、豪族の男

「おはようございます！鈴花様^{すずか}！！」

ボタンと襖を開ける音と共に、

朱音^{あかね}が大きな声で鈴花の部屋に入ってきた。

目を覚まして間もなかった鈴花は、
すこし迷惑に思いながらも笑顔をつくる。

「おはよう、朱音。今日はまた一段と早いのね」

「はい。また朝食前からどこかにお出かけされては困りますので」

「あら、そんなに心配しなくてもどこにも行きませんわ」

「鈴花様はいつもそう言われていなくなるではありませんか」
朱音は呆れた様子で肩を落とす。

「それに、今夜は大切な面会がございます。
それまでにやるべき事はたくさんございますよ」

「分かってますわ」

鈴花は朱音に着替えを手伝ってもらうと、いよいよ自分の部屋を出た。

そう。今日は先日、鈴花の父である光晴と約束をした日だ。
鈴花に求婚している男と合う。

鈴花は男がどんな人物なのか楽しみな反面、不安だった。
光晴の話では、財力も権力もある好青年だと言う。
普通なら、それを聞いただけで婚約を受け入れるだろう。

しかし、鈴花は違った。

今までもその美貌のためか、何人もの男に言い寄られたが、全て断っている。

会って、会話をして、父に謝る。
いつもその繰り返しだったのだ。

（しかしいい加減、私も我が儘^{わたくし}を慎まなくてはいけませんわ。
父上や母上の為にも、娘として・・・）

何度も何度も自分に言い聞かせている。

「ねえ、朱音」

食事を済ませ、屋敷の長い廊下を歩きながら、鈴花は朱音に問いかけた。

鈴花はふと足を止めて振り向き、小首を傾げる朱音を見つめた。襟足から長く垂れ下がる細い二本の三つ編みが、朱音の肩ではらりと揺れる。

「何でございましょう?」

鈴花はすつと目を細めた。口元は滑らかな弧を描く。

「頼りにしておりますわ」

「えっ?」

「今夜はとびきり美しい化粧を頼みますね」

ふふつと小さく笑うと、鈴花は再び正面を向き廊下を進んだ。

「は、はい! 勿論でございます!」

朱音は少し戸惑った様子を見せたが、すぐに慌てて鈴花の後を追った。

- - - - -

日が暮れ、町中に明かりが灯る。

いよいよ約束の時間が近づき、鈴花は化粧の仕上げをしていた。鮮やかな深紅に華やかな金の菊の刺繍が施された振袖に身を包んでいる。

前髪は上にくくられて、きらきらとした髪飾りがついており、透き通るような白い肌は、赤い着物のなかでより一層輝いて見える。真っ赤な口紅を塗りなおした頃、丁度外から牛車の音が聞こえてきた。

使用人たちが慌ただしく動き回る音の中に、陽気な男の声も聞こえてくる。

光晴が屋敷に着いたのだ。

鈴花は瞳を閉じ、ゆっくりと深呼吸をする。

「では、参りましょう」

屋敷の入り口にはすでに着飾った母の菊が、多くの使用人たちと共に光晴を出迎えていた。

鈴花もすぐにその中へ入る。

「おお、お菊に鈴花！今日も美しいのう」

「お帰りなさいませ、光晴様」

「お帰りなさいませ」

菊に続き、鈴花も光晴に頭を下げた。

顔を上げると、光晴のすぐ後ろに、使用人たちよりも上等な恰好をした男が二人いることに気付いた。

手前の一際目を引く男が、今回の縁談相手である男だろう。

鈴花はすぐに、光晴の絶賛していた意味が分かった。

色白に凛々しい顔立ち。品のある薄い口元には小さなほくろがあり、少し色っぽく見える。

左に流された前髪が、ふわりと風揺れていた。

（好青年というよりも色男って感じだね。私の好みではありませんけど）

そんな風に観察していると、鈴花の瞳ははたと男と交わった。

鈴花は無意識にじろじろと見てたことが恥ずかしくなり、思わず目を逸らした。

そんな鈴花を見て、男はふわりと笑いかける。

「光晴殿、ご紹介を」

「おお、そうであつたな」

男に施され、光晴はごほんと咳払いをすると、鈴花の方へ手を差し出した。

「こつちが一人娘の鈴花に、妻のお菊だ」

鈴花と菊は、男に向かって頭を下げる。

「娘の、鈴花でございます」

鈴花は精一杯の上品な笑顔をつくった。

「鈴花、こちらが今回縁談を持ちかけて下さった豪族の若殿、ほすみ 頌澄殿だ」

「頌澄と、申します」

光晴の紹介を受け、男も軽く頭を下げる。

「こっちは、私の付き人の霧木。むぎ 鈴花殿、噂通りお美しい方だ」

うつとりとした笑みを浮かべる頌澄に、鈴花は慌てて首を振った。

「め、滅相もございません」

そんな鈴花の様子を見て、光晴は豪快に笑う。

「はっはっは！鈴花も初心よのう」

そんな光晴につられて、菊もほほっと笑った。

「まあまあ、立ち話もなんですし、どうぞ、奥へお越してください」

二人が屋敷に通され、いよいよ席に着くと、

早速光晴は頌澄のすごさを語りだした。

暫く四人で話し、一段落ついたところで頌澄が口を開いた。

「あの、鈴花殿と二人でお話してみたいのですが」

「えっ」

突然の提案に、鈴花は思わず驚きの声を漏らした。

光晴と菊も、一瞬驚いた表情を見せたが、直ぐに笑顔を浮かべた。

「ほほ！そうであるな！

いつまでもわし等が居ては、若い二人にはお邪魔だのう」

そう笑いながら、光晴と菊は立ち上がる。

「ほれ、おまえ等もこの場はもう良いから、屋敷の仕事に移りなさい」

使用人も部屋から追い立てられる。

「あの、鈴花様……」

朱音が心配そうに鈴花に話しかけたが、それを鈴花よりも先に頌澄が遮った。

「付き人は、部屋の外に待機してもらっても構わぬぞ。

霧木にも、そこにいてもらうのでな」

すると、霧木と呼ばれた男は立ち上がった。

鈴花は、氷のように冷たい表情をする男だと思った。

つり目にきつと結ばれた唇。

瞬きすらしていないのではないかと思うほど、無表情だった。

「……そなたは」

「あ、朱音と申します」

きつと冷たい視線が朱音に注がれる。

そしてそのまま、朱音も霧木に連れられて部屋の外へ追い出され、とうとう部屋には鈴花と頌澄の二人になった。

初対面の男と突然二人きりになり、鈴花は体が緊張で強ばるのを感じた。

「やっと、二人きりになりましたね」

にこりと微笑む頌澄を見ても、少しも安心できない。

笑顔を崩さぬまま、頌澄は少しずつ鈴花に歩み寄る。

「あの、どうして……」

鈴花は反射的に少しずつ後ずさるが、いよいよ背後に壁が当たる。へたつと座り込む鈴花の上に、突然頌澄は覆いかぶさった。

顎をくいつと指で持ちあげ、頌澄は鈴花の目を覗き込むように見つめる。

あまりにも顔が近いたため、鈴花は目を逸らすこともできない。

（何、この人……！）

抵抗するという考えが鈴花の脳裏をよぎったが、決して無礼な態度は許されないことを思い出す。

無言で見つめあっていると、頌澄の口元が不敵に微笑んだ。

「美しい……」

ソワッ

その言葉に、鈴花の全身を寒気が襲った。

「あ、あの……」

「美しい、本当に美しい」

鈴花の言葉にかまわず、鈴花の瞳を見つめたまま頌澄はただ繰り返す。

「なんと美しいだろう」

そつと頌澄の指が鈴花の輪郭に沿って這う。

「そなたの瞳に映る私は、一段と美しい……」

（……え？）

鈴花ははっと気づいた。

（この方、私の目に映る自分を愛でているのだわ！）

途端に、勘違いをしていた恥ずかしさと、

頌澄の自己陶醉ぶりに落胆した感情が一気に込み上げてくる。

（確かにそこらの殿方よりは美しいですけど、こんなにうぬぼれた方は初めて・・・）

鈴花が何も言わずに固まっていると、頌澄は突然鈴花から離れた。立ち上がり、少し離れるとまた振り返る。

「鈴花殿、あなたは噂以上に美しい方だ」

（今度は、褒められている？）

それでも、鈴花は少しも嬉しさを感じなかった。

しかしここで無愛想にはいけないと思い、精一杯笑顔を作る。
「ありがとうございます。ほ、頌澄様こそ、美しい顔立ちですわ」
相手を褒めることを忘れない。

もちろん、鈴花にとっては社交辞令の言葉だ。

「そう、私は美しい」

鈴花の目をまっすぐ見つめながら、また頌澄は微笑む。

その様子は先ほどまでの人物と、まるで別人のようだった。

「そして私には、金も力もある」

まるで自分に言い聞かせるように語る。

「これまでも、多くの女性に言い寄られてきました。
私は全てに愛される存在。この世に必要とされている。」

そして、欲しいものは何でも手に入れてきた」

「まあ」

鈴花は頌澄の陶醉ぶり、何とも言えず、ただ驚いた声を出す。

「あなたですよ、鈴花殿」

「えっ？」

戸惑う鈴花に、再び頌澄は歩み寄る。

畳に膝をつき、鈴花と視線を合わせると、そっと手をとった。

「あなたを一目見た瞬間に欲しくなった。

こんな気持ちは初めてだ。

今私は、自分以外に美しい存在を初めて目にしている。

あなたは私の側に寄り添うのに相応しい女性だ」

握られている手に力がこもる。

「世の男は何人も妻を持つが、私はあなたさえ手に入れば他の女性など興味はない。

あなたが今の妻たちを捨てると望めば捨てますよ。

むしろ、あなた程の美貌を持ち合わせた女性など他にいないでしょう」

鈴花はあまりに大袈裟な言葉にたじろみながらも、笑顔を浮かべた。やはり頬は引きつる。

「そんな、大袈裟ですわ」

「大袈裟などではございません」

頌澄はふふつとまた笑みを浮かべる。

「確かに、妻の数などあなたへの気持ちの証明にはならないでしょう。」

現にあなたの父である光晴殿が菊殿しか持たないのだから」

「何が言いたいのです？」

鈴花は警戒した眼差しを頌澄に向ける。

「そんな目で見ないでほしい。」

私はただ、どうすればあなたの興味を引けるのか考えているのです」

握られた手の指と指が絡まる。

「私はあなたの体だけ欲しいわけじゃない。

心も、全て欲しいのですよ」

甘い吐息が鈴花の耳元へかかる。

「私なら、あなたの望みを全て叶えることができる」

頌澄の再び浮かべた笑顔をみて、鈴花の頭には二つの文字が浮かんだ。

危険。

この人は危険。

光晴と菊の顔が頭に浮かんだが、鈴花は頌澄と一緒にするなど耐えられないと思った。

きつと、恋は違う。

こんな不気味な感情は、私が求めているものではない。

頌澄が言葉を発するたびに、寒気が背中をゾクリと襲う。

鈴花が決断を言葉にしようとした時だった。

「……このお話は、きちんと縁談が成立してからお話しようと思っていたのですが」

突然、頌澄が意味深な言葉を発した。
思わず鈴花の中の好奇心が騒ぎ出す。

「お話、とは？」

「どうもあなたの様子を見てみると、今までの姫君のようにはいかないようなのでね」

まるで鈴花の心を見透かしたような、勿体ぶった言いをする。

「私の興味をそるようなお話でしょうか」

鈴花は新しい玩具を見つけた子供のような眼差しで、頌澄を見つめ

る。

そんな鈴花に、頌澄はにやりと微笑んだ。

「
“山神”を、ご存知ですか？」

十二、欲望の瞳（前書き）

2011/12/12

大幅に訂正を行いました。

十二、欲望の瞳

「…………ヤマガミ？」

鈴花は頌澄ほのむぎの言葉を繰り返した。

「はい、山神です」

頌澄はにこりと楽しそうに笑う。

「えっと…………」

鈴花は自分の記憶を探る。

「幼いころに聞かされた、昔話に出てきたような気がします」
すると頌澄はハハハツと馬鹿にしたような笑い声をあげた。

「ふふ、失礼。あまりにも可愛らしいことを言われるものだから
いい」

鈴花は幼く見られたことに少しムツとする。

「山神は、昔話などの架空の存在なんかじゃない」

頌澄は少しずつ声を潜める。

「“獣族”なら、ご存知かな？」

「獣族…………」

瞬時に、鈴花の脳裏にはあの狼の少年、八丸の姿がパッと浮かんだ。今までは名前だけ知るのみで、実際に目にしたことがなかった種族。いや、人間の目に触れてはいけない種族。

しかし鈴花は、八丸のことを不思議と親近感の湧く、心地の良い存在として感じていた。

まるで、同じ人間のような・・・

「人間でも、獣でもない種族。今もなお山奥で、確かに奴らは生息している」

鈴花の思考の途中に頌澄の言葉が入る。

（知っておりますわ）

心の中で悪態をつきながらも、鈴花は黙って頌澄の話を聞き続けた。

「山神は、獣族の中で神のように崇められている存在です。

山全体の統治者のような役割も持つ」

頌澄は立ち上がり、鈴花に背を向け語りだした。

「山神は神秘的な力で山を守っている。

山神がいる限り、山は人間のものにはなりえない。

そして山神の死は山の死へ繋がる」

鈴花が話の意図が分からず首を傾げていると、

頌澄はくるりと振り向き、その眼は真っ直ぐ鈴花を捉えた。

「私は、山神が欲しい」

低く呟かれたその言葉に、鈴花は身震いを感じた。

重く、冷たい声。

目は怪しげな光を放ち、口元は相変わらず不敵に笑う。

鈴花は頌澄の不思議な雰囲気、飲み込まれるような感覚を覚えた。

「先ほども述べたように、私は欲しいものは何でも手に入れてきた。金も、女も、地位も、都も。

あちらの農地も、こちらの農地も私のものだ！」

頌澄は狂ったように声を荒げる。

しかしすぐに、穏やかな表情を取り戻した。

「だが、まだ足りない。何か足りない、満たされない」

落ち着いた声で呟きながら鈴花に歩み寄り、再び目の前で膝をつく。

「そして分かったのですよ。私には足りないものが二つある」

欲望に燃えるその瞳は、鈴花の胸の奥にまで鋭く突き刺さった。

「一つはあの山。獣族なんぞが群がるせいで、あの山だけは私のものではない。

しかし、山神さえ手に入れば、山も、その神秘的な力も私のものになる。

そしてもう一つは・・・」

にやりと笑い唇を舐めると、頌澄の長い指が鈴花の着物の衿にかけられた。

冷たい手がするりと着物の奥へ滑り込む。

「やつ・・・！」

緊張と恐怖で、鈴花の口から思わず声が漏れる。

体ごと頌澄に押さえつけられ、うまく身動きが取れない。

そんな鈴花を見つめながら、頌澄は言葉を続けた。

「美しいもの。この目に刺激を与えてくれる、美しいものが欲しい」
腕を抑える頌澄の手に力がこもる。

「私は、今まで欲しいと望んで手に入らなかったものはないのですよ」

頌澄の指が、鈴花の髪を掬い取る。

「そう、ひとつもね」

そのまま鈴花の艶やかな黒髪は、頌澄の鼻元に引き寄せられる。

「……良い香りだ」

「……っ！」

鈴花の全身の毛が逆立つ。気づいた時には、頌澄のその手を振り払っていた。

「お、お止め下さい！」

フウ、フウと、鈴花の呼吸が乱れる。

そんな鈴花に、頌澄は相変わらずにこりと微笑んだ。

「光晴殿に聞きましたよ。鈴花殿は、自然が好きだとか」

突然の話の流れに、鈴花は疑問の表情を浮かべる。

「私が山を手に入れた暁には、あなたにも所有権を与えましょう。
あかつき

あの山が丸ごと、私たち二人だけのものになるのですよ。

どうです？考えるだけで興奮するでしょう？」

「い、いいません……」

鈴花は震える声を絞り出した。

「あの山は、山に生ける物たちの場所。それを人間が奪うだなんて・
・・」

私は、いません。欲しくない」

鈴花は力を込めた瞳で頌澄を見上げた。

肩を落とし、残念そうな表情を浮かべている。

「……まあ、いいでしょう。」

ならば他に、あなたの興味を引くことを考えるだけだ」

頌澄は再び鈴花に顔を近づけた。

「どうせあなたは、自分から私にすがり付くことになりますよ。嫌でもね」

重く呟かれた言葉に、鈴花はただ睨み返すことしかできなかった。

「今日のところは、ここまでしておきましょう」

そう言っと、頌澄は衣の埃を払いながら立ち上がった。

「くれぐれも、先ほどのお話は誰にも口外せぬよう誓って下さい」

立ち上がり、乱れた着物を整える鈴花の肩を強く両脇から抑える。

そして念を押すかのように低い声で再び呟いた。

「くれぐれも、頼みますよ」

「は、はい……もちろんですわ」

その一瞬、頌澄の表情は獣のような形相に強張ったが、

鈴花が震える声で答えると、再びにこりと優しげな好青年の表情へ

戻った。

「では、次にお会いする日を楽しみにしております」

頌澄が自分から離れた後も、鈴花の足の震えは治まらない。

（危険。危険だわ、頌澄……）

怖い。怖い。怖い。

頌澄が部屋の襖を開けたので、廊下の明かりが部屋の中へ差し込む。

「光晴みつはる殿を呼んでおくれ」

頌澄が朱音あかねに話しかけている声が聞こえる。

「今夜はこの辺で失礼する」

体の震えが少しずつ治まり、鈴花もゆっくりと部屋の外へ向かう。

「鈴花様っ！」

懐かしく感じられる温かい声が、鈴花の名を呼ぶ。

顔を上げると、心配そうな眼差しで見つめる朱音の後ろで、頌澄が笑っていた。

隣では、頌澄よりも背の高い霧木むぎが、冷たい目で鈴花を見降みくだしている。

（この方も、頌澄の野望を知っているのね・・・）

鈴花は必死に冷静な心を取り戻すと、朱音にふわりと微笑んだ。

「この方たちをお見送り致しましょう」

- - - - -

頌澄たちが去った後、鈴花はすぐに自分の部屋でへたりと倒れ込んだ。

そんな鈴花に、朱音は慌てて駆け寄る。

「大丈夫ですか！鈴花様」

「大丈夫……」

朱音に帯を解いてもらいながら鈴花は呟く。

「久しぶりに緊張をして、疲れただけよ」

「鈴花様……」

髪飾りも取り外し、重い振袖から腕を抜く。

着替えの手伝いをしながら、朱音は口を開いた。

「鈴花様。あの霧木とかいう男、術師じゅしでございました」

「術師？」

突然の言葉に、鈴花は思わず上ずった声を上げる。

「はい。あの男、私共が部屋から出たのを確認すると、部屋の中の声が外に聞こえぬように呪まじないをかけました。

大きな素振りは見せずに、呪文だけをぼそぼそ呟いていたので、きっと私しか気づいた者はおりません」

鈴花の化粧を布で落としながら真面目な声で黙々と朱音は話す。

「すぐに違和感を得たので、阻止しようとしたのですが、間に合わなくて……」

「そう言えば、朱音も術師でしたわね」

「多少の教養があるだけでございます。

だからこそ、鈴花様をいつでもお守りできるように私が付き人に選ばれたのです」

照れたように朱音は言う。

「本当に、朱音は頼りがいがありますわ」

「勿体なきお言葉です」

鈴花の言葉で、更に朱音の頬は赤く染まった。

一通りの着替えが済むと、朱音は鈴花にお茶を入れた。
鈴花はそれをゆっくり啜り、一息つく。

体にゆっくりしみこむ温かさが、とても心地よく感じた。

「ねえ、朱音」

「はい」

隣で正座をする朱音が、姿勢を正して応える。

「私、やはり頌澄様に恋心は抱けませんわ」

「鈴花様……」

「あの方の目を見てみると、とても不気味な感情に襲われるのです」

何か恐ろしいことを抱いているような、欲望に染まった瞳。

不敵に微笑む頌澄の顔が再び思い起こされる。

（山神……）

最後に念を押されたときの恐ろしい頌澄の形相が脳裏をよぎる。

（誰にも口外できない……）

あの時の恐怖が沸き起こり、小さく体が震える。

霧木が術師だと分かったことで、見張られているのではないかと考えてしまう。

朱音は心配そうな顔で鈴花を覗き込んだ。

「顔色が悪いです。今夜は早めに床についた方が良いかと」

朱音の優しい言葉に、思わず全ての不安を吐き出してみたいと思ったが、

鈴花は感情をぐっと拳を握り堪えた。

「ありがとう、朱音。もう下がって良いわよ」

「……では」

そう小さく返事をする、何度も心配そうに振り向いたが、朱音は鈴花の部屋を後にした。

鈴花はひとりになり寢床につくと、布団を頭から被って体を丸めた。不安と恐怖が混ざり合い、腹のあたりでぐるぐる回っているような感覚に襲われる。

頌澄は帰り際に、光晴には「また後日」と言って去って行った。その時の光晴は、頌澄が去った後心配そうに鈴花を見たが、何も言わなかった。

（父上のため、母上のため）

頭の中で何度も繰り返すが、鈴花はどうしても頌澄を受け入れられそうになかった。

（金、力、地位、・・・・）

頌澄とのやりとりで出てきた単語が頭の中で再生される。

（山神、獣族・・・）

「・・・獣族？」

はっと鈴花は顔をあげた。もやもやした感情が少し薄れる。

（明日は、八丸さんとの約束の日！）

二日前に柳の木の下で、三日後に会う約束を立てたことを思い出す。
（明日の朝になれば、八丸さんに会える）

沈んだ気持ちが徐々に晴れ、わくわくした感情が込み上げてくる。
まだ二度しか会ったことのない少年に、
なぜここまで胸を動かされるのか鈴花には分からなかった。

しかし今はただ、明日会えるというそれを考えるだけで胸の鼓動が
高鳴るのだ。

きらきらと輝く黄色の瞳。すこし筋張った首筋や、たくましい腕。
くしゃっと無邪気に八重歯を出して笑う笑顔。

柳の木の下で見た八丸の姿を思い起こす。

（八丸さんは不思議な人）

そんな言葉を頭に浮かべてすぐに、はっと気づく。

「・・・不思議な、狼さんだわ」

もやもやとしていた気持ちは、気づけば明日への期待で吹き飛んでいた。

鈴花は布団の中で、ゆっくりと目を閉じる。

そして夜の静けさに浸りながら、夢の中へ落ちていった。

十二、欲望の瞳（後書き）

文章は前回の投稿文とほとんど変わっておりませんが、訂正完了しました。

やらしい文が増えたただけなんって言わせません

また何か思われることがあれば、ご指摘いただけると幸いです。

十三、想い

まだ日が昇りきらない早朝。

霧の里がまだ静まりかえる中、八丸は早々と家を出ると真っ直ぐ小川のほとりに立つ大きな柳の木を目指した。

鈴花と約束を交わした場所だ。

早起きの小鳥たちのさえずりを背景に、八丸は黙々はちまると小道を進んでいた。

踏みしめる草花が、まだ朝露で湿っている。

八丸は小川に近づくほど、胸の鼓動が早まっていることに気付いた。不思議な緊張感が腹の奥から沸き起こり、握り拳の中が熱く汗ばむのを感じる。

（会いたい。早くあの人に会いたい・・・！）

足は次第に速まり、柳の木が見えたところには、いつの間にか駆け出していた。

着いてみると、まだ鈴花すずかの姿は無かった。

八丸は少しがっかりして小川へ歩みよる。

水面に映る自分の姿を見て、肩まで垂れ下がる黒髪をキュツと後ろで結び直した。

水をすくって顔を洗うとブルブルと水を振り落とし、向かいの岸へ

顔を向けた。

以前のように、そこに鈴花が立っているのではないかと期待したのだ。

だがそこには、誰の姿もなかった。

「早すぎたか」

思わずぽつりと呟く。八丸は手持無沙汰にうろつろした後、どつしりとそそり立つ柳の木の前に腰を下ろした。

鈴花に会えると感情が高ぶって、いつもよりも早起きをしたからだろうか。

澄みきった心地の良い山の空気に、優しい子守唄のような小鳥のさえずり。

幹に背をもたれていると、不思議と安心感に包まれて眠たくなってきた。

（あったかい……）

木から大きな自然の力が、自分の中へ入り込んでくるような心地を感じていると、いつの間にか八丸は眠りに落ちていた。

『……さん』

（何か、聞こえる……）

『八丸さん』

(鈴花の声・・・?)

温かい優しい声

「・・・さん、八丸さん!!」

「わっ!!」

八丸は激しい体の揺れとその声に驚き、思わず飛び起きた。
顔をあげると鈴花がにっこりと微笑んでいる。

「おはようございます、八丸さん。やっと起きてくれましたね」

「鈴花!あ、俺 いつの間に・・・!」

八丸は慌てて空を見上げた。

日はあまり動いていなかったたので、それほど長くは寝ていないらしい。

そんな八丸を見て、鈴花はくすくす笑っていた。

「ごめんなさい、少し遅れてしまいました」

「いや、俺の方こそ。寝入ってしまったて、ごめんな」

「いえ。待っていて下さったことが嬉しいのです」

鈴花の柔らかい笑顔を見ると、穏やかな気持ちになる。

二人は以前と同じように並んで柳の木の下に腰を下ろした。すると、鈴花が申し訳なさそうな顔で口を開いた。

「実は、昨晚少々立て込みまして……」。

今朝は使用人が心配をして、いつもよりも早く私の部屋へ来たのです。

そのため、朝食をとるまで自由になれませんでした」

「そうだったのか」

「本当にお待たせして、申し訳ありません」

鈴花は八丸に向かって正座をし、深々と頭を下げた。

「そんな、大袈裟だ」

八丸は笑いながら鈴花の肩を起こし、顔を上げさせる。

「八丸さんは、優しいんですね」

「いや、俺はただ……」

（鈴花に会いたかったただけだ）

八丸は思わず鈴花から目を逸らした。

気持ちを言葉にしようとするだけで、顔が熱くなる。

結局言葉に詰まってしまった。

「八丸さん」

鈴花は木に背を向けて座りなおすと、口を開いた。

「私、夢を見たのです」

「夢……?」

鈴花はこくりとうなづく。

「はい。不思議な夢でしたわ」

「どんな夢だったんだ?」

八丸の興味が鈴花の話に集中する。

「八丸さんが出てきたのです」

「俺が!？」

「はい。夢の中で私は、白い兎うさぎでした」

「えっ……?」

自分の名前が出たことで、一瞬体の中で熱い血が騒ぐような感覚に襲われたが、

次の言葉を聞いた瞬間、一気にその血が引くような思いがした。

(鈴花がウサギ)

瞬間、頭の中で先日さきの叔父たちの言葉を再び思い出す。

『おめえ、ヒトを食ったのか?』

以前と変わらず美しい鈴花の横顔。白い肌。赤い唇。

夢を思い出しているのだろうか、くすくすと笑うあどけない表情。口元にあてられている細い指。

そして、先ほど肩に触れたときの、柔らかい手触りがよみがえる。

「……ああッ」

(鈴花がウサギ　鈴花がウサギ　鈴花がウサギ)

体の中で、何かがふつつつと沸き起こるような感覚がする。不思議な感覚に襲われ、混乱しそうになったその時だった。

そつと、左手が温かいものに包まれた。

はつと顔を上げると、心配そうな鈴花の顔がそこにあった。

「大丈夫ですか？」

「お、俺・・・今・・・」

「汗がすごいですよ。急に息が荒くなったので、驚きましたわ」

確かに八丸の呼吸音は、フウ、フウと荒いものに変っていた。

そつと空いている右手を胸にあて、呼吸を整える。

「・・・何か、病気なのですか？」

「いや！違う、大丈夫だ」

鈴花の心配そうな顔に、思いつきり笑顔を向ける。

「それで、夢がどうしたって？」

「あ、はい」

鈴花はそつと八丸の手を離した。

不意に八丸は、何とも表せない寂しさを感じた。

「八丸さんは狼で、私は兎で」

「うん」

「山の中を駆け回って遊んでいたんですわ」

「え？」

あまりにも和やかな画が頭に浮ぶ。

鈴花は穏やかな表情で空を見上げた。

「とても、楽しい夢でした」

八丸は自分の心が途端に穏やかになるのを感じた。

（ああ、そうか）

鈴花が再び八丸を見て微笑むので、八丸もにこりと微笑む。

（俺はこの人を、食べたいだなんて思わない）

そつと鈴花の頬に手をあてる。

「は、八丸さん……？」

鈴花が不思議そうな瞳で八丸を見上げた。

（鈴花は人間だけど）

八丸はそんな鈴花の瞳を見つめ返す。

「……綺麗だ」

かすれるような、優しい声で八丸は呟いた。
みるみる鈴花の頬は赤く染まる。

「……えっ？」

「本当に、鈴花は綺麗だ」

「ど、どうしたのですか急に……」

「鈴花はさ」

八丸は鈴花の頬にあてていた手を、そつと放した。

「顔も、心も綺麗なんだな」

鈴花は目をぱちくりさせて驚いていたが、次第にはにかんだ笑顔を浮かべた。

「八丸さんは、不思議ですね」

「不思議？」

「だって、私をこんなに幸せな気持ちにするではありませんか」
照れくさそうに、自分の両手で口元を覆っている。

「八丸さんにそう言って頂けると、嬉しくなるのです」

「そんな・・・」

思わず八丸まで頬が赤くなる。

「鈴花ほどの人なら、綺麗だなんて言い慣れているだろ」

「そんなことございませんわ」

鈴花はふるふると首を振る。

「八丸さんの言葉と他の殿方の言葉では、

まるで違う言葉を言われているように感じるのです」

あまりにも真面目に言う鈴花を、八丸は恥ずかしさから直視できなかった。

「それに、名前も・・・」

「名前？」

「八丸さんは、私を“鈴花”と呼んでくださいます」

「そ、それが・・・？」

戸惑っている八丸を見て、再び鈴花は微笑んだ。

「それが、嬉しいのです」

八丸は鈴花の笑顔の意味がいまいち理解できず、うつむきながら頭ポリポリ掻いた。

「んー、よく分かん……」

「うふふっ 良いのです、分からなくても」

二人はしばらく会話を楽しんだ。

そんな楽しそうな二人の上を、一羽の鷺^{わし}が飛んでいたことにも気づかず。

以前のように日が高くなると鈴花は立ち上がった。

「そろそろ、戻らなくてはいけません」

「もうそんな時間か」

八丸も名残惜しそうに立ち上がる。

「なあ、あの……」

「はい」

「また……」

「また、会って頂けませんか？」

八丸が言い切る前に、鈴花が八丸を誘った。

意外な言葉に、八丸は一瞬言葉に詰まってしまふ。

そして徐々に、嬉しさが全身に込み上げてきた。

「あ、ああ。会おう！会いたい！」

「では、また三日後に」

微笑み頭を下げる鈴花に、八丸は手を振る。

そして鈴花の後ろ姿が見えなくなるまで、そこに立ちつくしていた。

今さっき別れたばかりなのに、もうすぐにも会いたい衝動に駆られる。

胸がドキドキと激しく脈打っていて、頭の中は鈴花の笑顔でいっぱいになる。

「その人ばかりを考える……」

八丸は不意に、葵^{あおい}の言葉を思い出した。

（あ、そっか……）

自然と笑みがこぼれる。

（これが、恋なんだ）

暖かい木漏れ日が、八丸を優しく照らす。
まるで心の中まで照らされているように、暖かい気持ちに包まれていた。

十四、小さな嘘

八丸は鈴花はちまるからうつたわずかな人間の匂いをとるために、
小川で少し水浴びをした後、霧の里を目指して歩きだした。
すると、里の入り口であるイチヨウの木の下に、一人の人影が見える。

その人影は八丸の存在に気が付くと、こちらに向かって歩いてきた。
目を凝らして見ると、金色のきらきらとした美しい髪がなびいてい
るのが分かる。

その青年は、響炎きょうえんだった。

「よう、八丸」

「あ、響炎。どうしたんだ？こんなところで」

少し違和感を感じながらも、八丸はいつもの調子で話しかけた。

響炎は無表情のまま、首を少し傾げると、真面目な瞳で八丸を見た。

「お前、また朝からどっか行ってたんだな」

「あ、ああ。ちょっとな」

目を逸らす八丸の顔を響炎は不思議そうに覗き込む。

「なんで隠すんだよ」

「えっ」

「俺に八丸が隠し事なんて百年早いんだよ」

「響炎……」

（鈴花のことを……）

しかし、八丸はぐつと言葉を飲み込んだ。

いくら相手が響炎であっても、やはり人間である鈴花の話をするのは躊躇いがある。

（でも、何もないだなんて、言うだけ無駄なんだろうな）

八丸はごくりと唾を飲み込み、響炎を見た。

無表情だが、今響炎は怒っている。長い付き合いだから分かる。

「ごめんな、響炎」

響炎の眉がピクリと動いた。八丸はふうつと息を吐き、気持ちを落ち着かせた。

「実は、人に会っていたんだ」

「……誰だ？」

「ほら、前にとっても美しい人に会ったと言っただろ。あのんだ」

「ああ、そういえばそんなこと言ってたな」

響炎は記憶を探るように腕を組み、上を見上げた。

「それで？」

「あ、うん」

これだけでやり過ごせると思ったが、やはり厳しいようなので、八丸は言葉を続けた。

「^{もみじ}栴の里の子だよ。以前会ったとき、また会おうと約束をしていたんだ」

「椋の里？よくそんな遠いところから来てくれるな」

「本当に美しい・・・狼の、女の子だよ」

八丸の言葉を聞くと、また響炎の眉がピクリと動いた。

「・・・へえ」

探るような瞳で八丸の目を見てくる。

深く茶色い瞳が八丸の心を見透かしているかのようにだった。

「好きなのか？」

「えっ!？」

予想外の言葉に、思わず体がびくつと跳ねた。

「その子のことか、好きなのか？」

再び問い詰める響炎の言葉に、なぜか顔が熱くなる。

八丸は足元に目を泳がせながら自分の心に問いかけた。

（鈴花が好きなのか？）

「ああ」

顔を上げて、今度は真面目な面付きで響炎に向き直る。

「好きだ」

はつきりと、力強く言い放った。

「好きなんだ、その子のことか」

すると突然、響炎は腰に手をあて首を垂らした。
そして、フンッと鼻を鳴らすと再び顔を上げた。

その表情は、先ほどより緊張感が解けているようだった。
八丸が真面目な表情を崩さないでいると、響炎の口元が緩み、次第にその表情は笑顔に変わった。

「ハハっ 分かったから」

その言葉に八丸の表情も緩む。

「お前の気持ち、分かったから」

「響炎」

「だからさ、俺に告白するみたいに言うな。気持ち悪い」

「なっ！お前が言わせたんだろっ」

八丸がいつものように響炎に掴みかかると、その手を響炎はぐつと押さえた。

「え？」

響炎の行動に驚き顔を上げると、
冷たく、しかし奥では炎が燃えているかのような瞳が八丸を見ていた。

ぐつと腕を引き寄せられ、顔が近くなる。
あまりにも真剣な響炎の瞳に、背筋にヒヤッと寒気が走った。

「お前が本気なら、葵は俺がもらっぞ」

重みのある低い声で、響炎ははつきりと言った。

力強い目から目が離せない。

（葵・・・？）

突然パツと腕が解放される。その衝撃で八丸はよろけた。

「お前、何で葵・・・」

「いい。分かってなかったのなら、いいんだ」

そう話す響炎は、再びいつもの親しい表情に戻っていた。

「あ、いつけねえ！また葵に美夜^{みよ}の面倒見てもらってたんだった」

明るい声をあげ、霧の里の方へ振り向く。

「響炎？」

くるっと八丸に向き直った響炎は、笑顔だった。

太陽の光のように、眩しい笑顔。

「ありがとな、話してくれて」

嬉しい返事であるはずだが、百面相のような響炎の表情の変化に、八丸は戸惑いを隠せなかった。口ごもってしまい、うまく返事の言葉が出てこない。

「不安だったんだ。八丸が俺に隠し事してるって気づいてから、見捨てられたような気がしてさ。

でも、ちゃんと話してくれた。だから今はすごく嬉しい」

あまりにも素直な響炎の言葉は、まっすぐ八丸の心に突き刺さった。

（俺、響炎のこと何も見てなかった）

響炎に対して、たまらなく申し訳ない気持ちで胸がいっぱいになる。

「ありがとう」

自然と感謝の言葉が口から洩れた。

「照れくさいな」

「お前こそ」

二人はにいつと顔を見合わせて笑う。

「じゃ、俺は先に里に戻るから。お前も、さつさとチビどもの飯獲つて来いよ」

そう言つて響炎は八丸に手を上げて見せると、イチヨウの木を指して駆け出した。

「あ、忘れてた！」

響炎の言葉に本来の自分の仕事を思い出す。

「じゃあな、響炎！」

響炎の後姿に手を上げる。次第にその姿は、深い霧の中へと姿を消した。

八丸は獲物を捕りに山へ引き返そうとした。
その時だった。

「八丸。嘘はいけないよ」

「誰!？」

突然どこからか、自分の名を呼ぶ声が聞こえた。
辺りをぐるりと見渡すが、どこにも姿が見えない。
緊張で汗ばむ拳を握りしめた時だった。

「ここ、ここ!上だよ、上」

「その声……」

八丸は声のする背後に振り返った。

高くそびえ立つブナの木の上に、誰がいる。
束ねられた長い黒髪が風になびいており、爽やかな笑顔で八丸を見下ろしていた。

「飛鳥さん……！」
あすか

名前を呼ぶと、その好青年はすたつと地面に飛び降りた。
そして八丸に歩み寄ると、にこりと優しい笑みを浮かべる。
しかし八丸は、その笑顔が無性に恐ろしく感じた。

「やあ、八丸」

「飛鳥さん。さっきの言葉……」

「うん」

嫌な予感がする。ただ八丸は本能で感じていた。

「話の女の子が人間だったなんてね。びっくりしたよ」

軽い調子で発せられた言葉だったが、八丸は身が凍るような感覚に襲われた。

「……み、見てたんですか」

素直な疑問が、思わずそのまま言葉になる。

「良く響炎に、嘘が言えたね」

少しずつ、ゆっくりだが飛鳥が距離を縮めてくる。
八丸は無意識に後ずさっていた。

「……言つべきじゃないと、思ってたんです」

「なんで？」

「そりゃ……」

「人間だから？」

ドンッ

「あっ」

気づいた時には、大きな木に背中がぶつかっていた。

飛鳥の顔からは笑顔が消えており、八丸のすぐ目の前に立っている
ので逃げ場がない。

「どうしたんですか、飛鳥さん」

飛鳥の放つ威圧感に、声が震える。

「それはこちらの台詞だよ？」

八丸は耳元で小さな風の音を感じた。

ちらつと目をやると、鷲のかぎ爪を備えた飛鳥の手が、
顔のすぐ横で木の幹に深く突き刺さっている。

八丸を逃がさないつもりなのだろう。

いつもの優しい態度からは想像できない飛鳥の変貌ぶりに、

八丸は逃げようと考えることが無駄であると判断した。

何とも言えない緊張感が、八丸の全身を支配する。

「……やめておけ」

小さく、しかし重みのある声で飛鳥が呟いた。

その鋭い黄色の瞳が八丸を真っ直ぐ見つめる。

獲物を捕らえる、鷲の目だ。

「人間の女なんて、やめておけ」

「なんで……」

「負の関係にしか成り得ないからだ。お前は獣族、狼の遺伝子を引

き継ぐ男だ。

それが獣族にとって敵である人間の女と結ばれることが、許される
と思うかい？」

八丸は強く唇を噛みしめた。

「お前の家族も、友達も、獣族全員が、許すわけがない。子供でも
分かることだよ。

それに、人間側だってそうだ。

人間からしてみたら、俺たちは汚れた血の種族だと言われている。
お前はそれを知ってて、あの子に近づいているの？」

「そ、それは・・・」

（知らない。そんなこと知らない）

八丸は自分が今更ながら人間について無知だと自覚した。

鈴花から人間の生活の話を聞くだけで、

何となく人間がどういうものか分かったつもりになっていたのだ。

「・・・人間は、俺達とあまり変わらない」

八丸は、逸らしたくても逸らせない飛鳥の目を睨み返す。

「人間も、俺達みたいに笑って、家族を、自然を、愛している」

「あの子から聞いた？」

飛鳥の問いかけに、八丸は黙って頷く。

「そう。一部の人間はね。そしてまた、残りの人間は残酷だ」

「なんで・・・」

飛鳥の言葉に、八丸の今までもやもやしていた感情は
腹の奥からふつつつと怒りとなって湧き上がってきた。

思わず牙をむき出し、ギラリと光る目で飛鳥を威嚇^{いかく}する。

「なんで決めつけるんですか！！」

一度大きな声を出したことで、八丸の感情の糸がぷつと切れた。

口から出る言葉が止まらない。声も次第に大きくなる。

「なんでそんな、知ったようなことを言えるんですか！飛鳥さんに、何が分かるんだよ！」

「分かるよ」

「嘘だ！飛鳥さんは何も知らない。」

人間の残酷なところなんて、俺でも十分知っている！赤ん坊でもわかる！

でも、良いところを知らないだろ？飛鳥さんは、人間の優しい部分を知らないんだ！」

「知っている」

「じゃあなんで、なんでやめておけだなんて言うんですか！

俺の気持ちなんて分かるわけない！

相手が人間でも、誰を好きになろうが、そんな俺の自由じゃ・・・」

「知っているから！だからやめておけと言っているんだ！」

感情的になっていた八丸の言葉を、飛鳥は怒鳴りつけて遮った。突然の大声に、八丸はビクリと体を震わせ大人しくなった。

八丸も飛鳥も、息遣いが荒くなり、フウ、フウと肩を上下する。

「八丸の気持ち、俺は分かるよ」

八丸は飛鳥の鋭い眼差しの奥に、一瞬いつもの暖かさを感じた。

「俺も一度、人間の女に恋をしたんだ」

十五、驚の恋

春風の吹き渡る青空の下、霧の里は無邪気に遊ぶ子供達の声が響いていた。

子ども達は人の姿の子もいれば、狐や狼の姿でじゃれ合っている子もいる。

そんな楽しそうにはしゃぐ子ども達を、響炎きょうえんと葵あおいは木陰から並んで眺めていた。

響炎は腕枕をして横になっている。その横で葵は膝を抱えて座っていた。

「元氣ねえー」

「そうだな」

響炎はチラリと葵を見た。

にこにこ優しい表情で子ども達を見ている。

葵の目は睫毛が長くてぱっちりとした二重だ。

普段は目力が強いそんな瞳が細められ、暖かな表情をつくっている。そんな葵に、響炎は見とれてしまった。

「美夜ちゃんも、楽しそうね」

突然葵がそう言って振り向いたので、響炎は咄嗟に目を逸らした。

「あ、ああ」

視線を他の子どもと遊ぶ美夜に移した。

人の姿の美夜は、無邪気な笑顔を浮かべて、走り回っていた。
「葵」

「ん？」

響炎の呼びかけに、葵は首を傾げて振り向く。

「いつも美夜の面倒見てくれて、ありがとな」

「いいのよ、私子ども好きだから。美夜ちゃんといえるの楽しいよ」

葵は笑いながら視線を正面に戻した。

再び二人は沈黙になり、子どもの声だけが辺りに響く。

「……ねえ、響炎」

突然葵が口を開いた。

「なに？」

響炎はむくりと起き上がり、葵を見る。

先ほどの笑顔から、真面目な表情に変わっていた。

「最近の八丸、はちまる変だと思わない？」

「八丸？」

響炎は眉をぴくりと動かす。

「……なんで？」

「んー、ちよつとねえー」

葵は曖昧な返事で目を地面に泳がせた。

そんな葵を見て、響炎は胸の奥がもやもやした。

「八丸が……心配なの？」

「え？」

葵はパツと顔を上げたかと思うと頬を赤らめ、すぐにまた膝に顔を埋めた。

「うん・・・だって、あいつ昔からなんでも独りで抱え込んだじやうでしょ？」

だから幼馴染として、なんか・・・放つとけないのよね・・・」

葵の恥ずかしげに話す様子を可愛いと思う一方で、響炎は八丸に激しい嫉妬を感じた。

（やっぱり、葵は八丸が好きなんだ・・・）

思わず唇を噛み締める。

（なんでこんなに可愛い葵を、八丸は放っておけるんだ？）

葵の高く結ばれたポニーテールが風でかすかに揺れている。

その下の綺麗なうなじを見ると色気を感じて、響炎は胸がどくんと高鳴るのだった。

「ねえ、響炎は八丸から何も聞いてない？」

心配そうな葵の瞳に、ぎゅっと抱き締めたい衝動に駆られる。

「いや・・・別に・・・」

直後、響炎の頭に先ほどの八丸とのやり取りが浮かんだ。

「あっ」

「なに？」

「そっぴゃあいつ、好きな人ができたらしいよ」

「・・・えっ・・・？」

瞬間、葵の表情が凍りついた。

普段も大きな瞳がいつそを大きく見開いている。

「は、八丸に好きな人・・・？」

「うん、桜の里の子だとか」

「ふうーん……」

「気になる？」

「え？いや、別にー……」

そう答えながらも明らかに動揺している葵を見て、響炎はすぐに嘘だと分かった。

「だから、あんなこと聞いてきたんだ……」

ぽつりと目線を落としたまま葵が呟いた。

「どうした？」

「あ、うつん！何もないの！ちょっと独り言」

えへへと笑ってごまかす葵の作り笑顔に、響炎は胸が苦しくなるのを感じた。

「なあ、葵」

「うつん？」

「なんで、八丸なの？」

「え？」

「俺、葵の気持ち知ってるよ」

響炎は真面目な顔で真っ直ぐ葵を見つめた。

「や、やだな、なんのこと？私、八丸のことなんて幼馴染としか……」

「嘘つかなくていいから」

「響炎……」

「俺、葵のこと……」

「葵姉ちゃーん！見て見てー！」

響炎が言葉を言い切る前に、遊んでいた子どもが葵の名を呼んだ。

「葵姉ちゃーん！ほらほら！」

他の子ども達も大きく手を振っている。

子ども達の手にはシロツメグサで作られた花の冠がそれぞれ握られていた。

「あ、はーい！」

葵はパツと子ども達の方へ振り向き、大きな声で返事をした。
響炎は思わず言葉の続きを飲み込む。

「ごめん響炎、今なんて？」

「いや、いいんだ。気にしないで」

響炎はへらつと笑って不満気な顔をしている葵の頭を撫でた。

「行つてあげて。子ども達が呼んでる」

「響炎も行こ？」

「いや、俺はもうちょっとここで昼寝してるわ」

葵は再び不満気な顔をしたが、少し悩んだ末に、

子ども達の声に答えながら響炎のもとを離れて行つた。

響炎は葵の背中を見つめながら、再びごろんと木陰で横になった。

「・・・あーあ」

大きなため息をもらした後、ゆっくりと瞳を閉じた。

- - - - -

「あ、飛鳥^{あすか}さんが・・・？」

「うん」

山の木々が風で葉を揺らし、ザワザワと騒いでいる。

八丸は飛鳥の思わぬ言葉に衝撃を受け、目を見開いたまま固まっていた。

「俺は人間の女に恋をしたんだ。ちょうど、八丸くらいの頃だったかな」

「なんで……」

「聞きたい？」

少し首を傾げ、八丸の目を覗き込むように飛鳥は問いかけた。

「聞きたいなら、絶対誰にも口外しないと約束してもらわないと」

八丸はごくりと唾を飲み込んだ。

「き、聞きたい。約束します」

「うん、じゃあちよつと長くなるけど」

そう言いながら飛鳥はゆっくりと自分のかぎ爪を木の幹から引き抜いた。

すぐ真横の凶器から解放されたことで、八丸の中でほんのわずかに緊張が緩んだ。

「座ろつか」

「はい」

飛鳥に促され、近くに横たわっていた丸太に並んで腰を下ろした。

八丸はそわそわした気持ちで飛鳥に目を向けた。

横から見る飛鳥の顔は、高い鼻が際立ち一層美しく見える。

「……あの日は、秋晴れだったな」

懐かしそうに目を細めて、ゆっくりと飛鳥が語り始めた。

「気持ちの良い日で、いつもみたいに驚の姿で空を散歩してたんだ。油断してたんだよね。突然、パンって大きな音がしたと思ったら、

右の翼に雷が落ちたみたいな激しい痛みを感じたんだ。

あまりの痛さに羽ばたくことができなかったから、
なんとか左の翼を動かして、猟師から離れた所に着地した。

下りてすぐに人の姿に戻って右腕を見たら、案の定銃に撃たれていた。

出血が酷くて、意識が朦朧もろうとしてきたその時……

一人の女が、木の陰から現れたんだ」

僅かに、飛鳥の口元が緩んだ。

「心配そうな顔をして、ゆっくり俺に近づいてきた。

匂いで、人間だって分かったんだよ。

俺はやばいと思って動かせる左腕を翼に変えて、その女を威嚇いかくした。
でもそいつ、急に怒った顔になってね。

怪我してるんだから、見せなさいって俺を怒鳴りつけたんだ。

俺は獣族だぞって言ったら、それがなに？怪我人は怪我人でしょつて。

思わず拍子抜けちゃったよね。

その女の勢いに圧されて、いつの間にか腕に包帯が巻かれてた。

それから数日、空を飛べるようになるまでは、

近くの葉っぱとかをかき集めて寒さをしのいで過ごした。

その女は、頼んでもいないのに毎日俺のところに通って看病をしてくれた。

そのうち、あんまり親切にしてくれるそいつが可愛く思えてきて……

・・・

飛鳥が途中で言葉を止めたので、思わず八丸は口を挟んだ。

「好きに、なっちゃったんですか？」

飛鳥は目だけを八丸にむけ、口元を緩めた。

「飛べるようになったとき、そこを発つのが名残惜しかった。その女に会えなくなるのが哀しかった。

だから、これからもここで会おうと約束をして、俺は霧の里へ戻ったんだ。

それから毎日のように、女と会った場所に通って話をした。そいつの笑顔を見てるだけで幸せな気持ちになれたんだ。

会う回数を重ねるうちに、女は俺を好きだと言ってくれた。俺がいないと、生きていけないと言ってくれた。

でも、俺たちは種族が違う。

許されない恋だと分かっていたから、俺はその女の言葉をいつも曖昧な返事で流していた。

それでも次第に、種族なんて関係ないんじゃないかって思えてきてね。

これだけ想いあっているなら、それでいいと思ったんだ。でも・・・」

急に飛鳥の表情が曇った。八丸も思わずごくりと唾をのむ。

「俺が女に気持ちを伝えようと意気込んで向かったその日から、突然女はそこへ来なくなっただんだ」

「えっ？」

「俺は変わらず毎日そこへ通ったが、一向に女が姿を現すことは無かった」

飛鳥は空を見上げた。

白い雲が緩やかに青空を流れていく。

「何日もたつて、あの女に会いたくてたまらなくなつた俺は、女の住んでいる村を探すことにしたんだ。」

女の身なりがいつもボロボロだったから、賊民だろうと考えて空に飛びあがった。

そしたら案の定、その場所から数キロしか離れていないようなところに、

小さな集落を見つけたんだ。

すぐ近くに降りて仕事をしている人たちを見ていたら、見つけたんだ。

あの女が、小さな家から水桶を持って出てきたんだ。でも……」

突然、飛鳥の視線が下へ落ちた。

八丸も緊張して、つい体に力がこもる。

「女の元へ飛び出して行こうとしたら、数人の子どもたちがその女を囲った。」

その子たちがさ、女を……母ちゃん、母ちゃんって呼んでいたんだ。

それで、女が持つ水桶を自分たちが持つと言い張っていて、

女は笑いながら、ありがとುತ್ತて水桶を子供たちに渡してさ。その時に、見えたんだ。女の腹が。あいつ、身ごもってた」

飛鳥の視線が、八丸に向く。

八丸は、ただ目を大きく見開くことしかできなかった。

「旦那がいたんだよ。しかも、子どもまでさ。

腹が大きくなってきた、俺にばれると思ったから、あいつは俺に会いに来なくなつたんだ。

最初から、俺は愛されてなんかいなかった」

ハハッと乾いた声で笑う。

「俺って馬鹿だなーって思ったよ、本当に。

毎日会ってたくせに、その女のこと何も知らなかったんだ。

そう考えたら、女の顔を見てらんなくなつてさ。すぐに里に飛び帰った。

哀しさのような、怒りのような、落胆のような……なんとも言えない感情に押しつぶされて、苦しかった。

所詮、人間なんてこんなものだって開き直つたよ。

人間は、獣族と違って平気で嘘をつく生き物だ。

やつぱり、獣族と人間は通じ合うことなんてできないんだ」

「そんな……」

「だから、ね？八丸」

再び飛鳥との距離がずっと縮まる。

「八丸は、その女の子のことをどれほど知ってるの？」

「ど、どれほどって……」

「その子は、八丸を好きと言ってくれた？」

「……っ！」

「ほら、何も言えないじゃん」

飛鳥の目が鋭く光る。

「人間の女に片思いなんかするだけ無駄なんだよ。自分が苦しくなるだけだ。」

きつと、その女の子だって自分と八丸の立場の違いくらい分かっているよ」

「お、俺は……」

八丸は飛鳥から目を逸らそうとしたが、顔をぐっとつかまれ阻まれた。

「逃げんなよ」

恐ろしさと、困惑した思いが交じり合う。

（鈴花は俺をどう思っているのか。そんなこと、考えたことなかった）

頭の中に、鈴花の笑顔を思い出す。

たんぽぽのような暖かい笑顔。頬を赤らめたはにかんだ笑顔。

「かつ、彼女うあ……」

八丸が口を開いたので、飛鳥は手を放した。

「なに？」

「彼女は、笑っていた」

八丸は震える拳を必死に抑える。

「確かに飛鳥さんが言うように、あの笑顔は偽りなのかもしれない。俺は、彼女のことを何も知らない。」

お嬢様で、山が好きで、優しくて、可愛いくて、悪戯好きで……俺は彼女のそんなところしかわからない」

きつと目に力を込めて飛鳥を見る。

「でも、それでも俺は自分の気持ちに嘘をつけない。俺は、獣族だ。嘘はつけないんだ」

言葉にも力がこもる。八丸は、いつの間にか立ち上がっていた。全身で飛鳥に訴えていた。

「彼女が俺をどう思っていて、かまわない。だって、しょうがないじゃないか。好きって気づたんだから！これが恋じゃないなら、恋ってなんなんだよ！！」

八丸は飛鳥の肩を強く掴んだ。

「教えてよ、飛鳥さん……」

消え入るような声で呟き、首を垂らした。

飛鳥は真面目な表情を崩すことなく、八丸を眺める。

そして顔を上げない八丸に向かって、ゆっくりと口を開いた。

「大切な人ほど、案外すぐ近くに居るものだ」

優しい声に、八丸はゆっくりと顔を上げた。

掴んでいた肩から手を離す。

飛鳥は目を細め、穏やかに微笑んでいた。

「もつと、近くに居る子のことを考えてみな。

そしたら、本当に大切にしくなくちゃいけない子が分かるから」

「本当に、大切にしくなくちゃいけない子？」

八丸は首を傾げて考えてみたが、いまいち飛鳥の言葉が理解できなかった。

「うん。まあ、あとは時間が教えてくれる」

そう言うと飛鳥は立ち上がった。

ポンポンと尻についた砂を払う。

「長話しすぎちゃったね」

空を見上げたら、辺りは薄暗くなり始めていた。

きらきらと小さな星も出始めている。

「八丸」

飛鳥のきりつとした声に、八丸はびくつと肩を弾ませた。

「はい」

「今回は、見逃してあげる。みんなにも黙っていてあげる。

だから、早くその人間の女の子と会うのを止める。それが黙秘の条件だ」

念を押すかのような鋭い瞳が八丸を真っ直ぐ見据えている。

八丸は大きく深呼吸した。

「嫌です」

「なっ！お前、バラしても・・・」

「さっき言ったじゃないですか。」

俺は自分の気持ちに嘘をつけないって。それに・・・」

八丸はにこりと微笑んだ。

「飛鳥さんは優しいから。絶対に他の仲間には言いませんよ」

「判らないよ？俺、結構意地悪だし」

「大丈夫です」

八丸の崩れない柔らかな笑顔に、飛鳥は思わず苦笑いをした。

「響炎に嘘ついたくせに、自分に嘘はつけないだなんてな」

「そっ、それは・・・っ！」

「アハハっ 八丸もまだまだ子供だな」

飛鳥の言葉で八丸は自分の矛盾が恥ずかしくなり、顔が赤くなった。
口を尖らせて飛鳥を睨む。

「あ、あれとこれは嘘は嘘でも違うんですよっ」

「ふふっ はいはい」

飛鳥は八丸の頭をポンポンと優しく叩いた。

「でも、そのうち痛い目を見るのは自分だよ」
にこりと笑いかけられる。

「苦しくなったら、いつでもおいで」

「飛鳥さん！」

八丸の顔は一緒にして輝いた。

「あーあ！お腹空いちやったー。八丸、俺の獲物も捕ってきてよ」

「ええ！？でも今日はもうこんな時間だし・・・」

「あの人間の女の子、襲っちゃおっかなあー」

「と、捕ってきます！今すぐ！つまそーな鼠捕まえてきますね！」

八丸は慌てて山の奥へ向かって走り出した。

そんな八丸の背中を、飛鳥はくすりと笑って見送った。

「羨ましい奴……」

飛鳥は小さな声で呟くと、ゆっくりと霧の里へ向かって歩き出した。

十五、鷺の恋（後書き）

先日お気に入り登録してくださった方、ありがとうございます。
長くなりましたが飛鳥の過去編でした！。

どんなふうにかくか悩んだ末、結局会話口調で収まりました。
次回は鈴花サイド。みんな大好き頌澄も出るよ！

執筆頑張りますので、お楽しみに。今後もしろしくお願いします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3186v/>

山神

2011年12月29日23時54分発行